
ANCHOR

アレス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ANCHOR

【Nコード】

N6261A

【作者名】

アレス

【あらすじ】

成績優秀、運動音痴、趣味は読書、わりと冷静でクールな性格のエリック。学校の試験も近づいてきたある日、エリックの家に、突然の火事が起きた。母親は亡くなり、父親は行方不明。しかし、警察の話と最近の父親の態度、そして、父が持っていた謎の布表紙本。その本の内容をみた時、エリックは父親が放火をしたのだと悟った。母親を失い、激しい憎悪を抱いたエリックは、実の父親に復讐を誓う。

第一章：「エリック」

プロローグ【The avenger is mile】

第一章「エリック」

夜　　。冷たく、寂しい草むら　　。ここに一人の男が立っている。いや、正確に言えば、立っていた。今、彼はもう、立つてはいない。冷たいこの草原に寝そべっているのだ。正確に言えば、三十分くらい前のことを言えば　　、ここには二人の男が立っていた。一人は、人ではなかった……。三十分くらい前に、ここにいた二人のうちの一人は、今現在、ここに寝そべっている者だ。もう一人の者により、寝そべさせられたのだ。彼は、この草原と同じくらい冷たく、そして寂しい……。そして彼はもう、二度と起き上がれないのだ　　。永遠に……。

それから十三年前　　。時はもう、冬に差し掛かっていた。一人の少年が、雪が降り注いでいる紺色の空を見つめていた。彼の名はエリック。十五歳。冷静で、大人っぽい所があるが、本が好きで、ごく普通の少年であった。

彼は、机の上にあるノートと教科書を端にどけ、一冊の本を取り

出し、読み始めた。もうその本は、三分の一のところ、二百六十四頁まで読んでいた。彼は時折、本から目を離し、雪と雲に覆われた空を眺めた。時が十二時をまわろうとしたとき、机の後ろの、エリックの部屋の入り口のドアがノックされた。その約二秒後、彼は急いで椅子に深く座りなおし、

さつきまで読んでいた本を引き出しにいれ、端にあるノートと教科書を引っ張り、中央に置いた。

「エリック、入るわよ。」声の主は、エリックの母、マーシーだった。もつとも、エリックは最初から気づいていたが……。

「いいよ、母さん。」エリックは落ち着いた声で言った。マーシーは少しためらった後、エリックの部屋に入った。

いや、ためらったのではなく、待っていたのだ。本当にエリックが準備ができたのか、勉強をしているように見せかける、

準備ができているか。マーシーはエリックと目が合うと、ためらいがちに微笑みながらエリックに尋ねた。

「勉強は捗ってる？エリック。」「まあまあ、かな。外国語と地理は大半終わったけど、数学と世界史が全然終わってないんだ。」

エリックは疲れたような声を出した。実際ものすごく眠いし、疲れていた。勉強はまったくと言っていいほどしてないが、

ずっと本を読んでいたし、もう深夜十二時を過ぎている。眠いわけだ。今日は昼、一時から

五時まで勉強して、

七時まで休憩し、それからずっと机に向かっているのだ。机の椅子に座り、たまに教科書に目を通し残りは本を読んでいるか、

ずっと空を眺めているだけで、暇だった。本当はベッドに体を横にしたかったが、そんなことをし、つい睡魔に負け

眠ってしまったら父、デイヴィットが帰ってきたときに大変だ。エリック自身は勿論、母マーシーまで責任がとわれるのだ。

そんなことはさせたくない。だからエリックはずっと机に向かい、眠らずにいた。

確かにエリックは、デイヴィットの呆れたような眼差しでエリックをみつめ、ため息をつかれるのは嫌だったが、そんな父の気持ちもわからないことはなかった。

なにしろ、試験まであと、8日間を切っていたのだ。これで、必死に勉強せずに本を見ているのはかなりマズイとは、

エリックも思っている。しかし、何故か勉強に集中できないのだ。

父デイヴィットは、そんなエリックの様子に気づいたのか、

自分が会社に行っている間、エリックが勉強をしているかどうか、マーシーに偵察させているのだ。

マーシーは既に、エリックが勉強をしていないことに気づいているのだ。それでも気づいていない振りをし、

ためらいがちに部屋を出て行く。エリックはマーシーが部屋を出て行ったあと、そのまま教科書とノートを出したまま、

時計を見た。「そろそろ帰ってくるころが…。」彼は窓の景色をみつめながら呟いた。

第一章：「エリック」（後書き）

初投稿ですミ（o——o z z z

これからもどんどん毎日スペースで

書き上げますのでよろしくお願いします。

第二章「親子」

第二章「親子」

エリックの父、デイヴィットが帰宅したのは、午前一時過ぎだった。エリックは玄関の開く音と、

母マーシーが、父に接する声が聞こえると、すぐに父を出迎えに行った。

「お帰りなさい、父さん。」エリックはマーシーに言ったときと同じく、

落ち着き、なんの感情もこめずに言った。決して、父の帰りを嫌がったわけではない。

これは、エリックの家の決まりのようなもので、あまり感情むき出しに話さないのだ。

冷静で無感情なデイヴィットと、そしてエリック自身も気に入っているのだ。

デイヴィットやエリックには、興奮は似合わなく、好きじゃないのだ。

真夜中に帰宅し、やつれていたデイヴィットの手には、

一冊の本を持っていた。その本はいつも会社に持って行っている、

黒の皮製の鞆を持っていないほうの右手で掴んでいた。

デイヴィットは、二階から降りてきたエリックの顔をチラッと見てから、

右手に持っている茶色の表紙の本を彼に渡した。「近くの書店で買ってきたんだ、エリック。」

エリックは本を両手で受け取った後、父の顔を見た。短く刈っている黒髪。エリックと同じ、

灰色に、淡いブルーがかかった瞳。それを覆う、淵なしの眼鏡。エリックは、何故かこの一週間で

父が老けてしまったように見えた。目の下には軽く、隈ができてい

るだけで、特に変わった様子はないが、心の奥で、精神的に疲れているような気がした。

「どうした、エリック。そろそろ部屋へ戻って寝なさい。」

デイヴィットは、エリックがまだ、自分の前で立っていることに気づき、声をかけ、左手に抱えていた

黒の鞆から一冊の厚く、文庫本サイズの藍色の本を取り出した。布表紙、か。

今時珍しいな。エリックは、デイヴィットの出した布表紙の本を見つめながら心の中で呟いた。

彼は特に気にせず、二階へ戻ろうと後ろを向こうとしたとき、その本のおかしな所に気づいた。

題名が、ない。

エリックはもう一度、デイヴィットの持っている、藍色の布表紙の本を見つめた。本の名前がなければ、

著者名も見当たらない。おかしな本もあるものだ。普通の本は、表紙に本の名前と、

著者名が書かれているものだ。別のところに書かれているのだろうか。

エリックはもつとその本を眺めていたかったが、デイヴィットの視線が感じ、二階の部屋へ引き返した。

自分の部屋の時計を見ると、もう深夜一時半をまわっていた。

エリックは伸びをし、固まっていた筋肉をほぐしてから、デイヴィットからもらった本を見た。

薄めの色の茶色の本。ラルフ・ブライン著。題名は、

「ANCHOR」（碇）、か。

彼は、常時胸につけている碇型の首飾りを手に取り、顔に近づけて見てみた。

銀色の約、7センチくらいの物だ。これは、エリックが9歳のとき、デイヴィットが

彼にプレゼントしたものだ。エリックがそれをもらったとき、「お

父さんは、船がすきなの？」と、
デイヴィットに何回か尋ねたことがある。デイヴィットは、エリックが尋ねると

やさしく微笑んで答えた。「碇はな、ある場所に船をとめたいときに、使う重りで、

それを水の底におろすと、船は流れずにとまってくれるんだ。凄い物だろう？

それに、碇には、頼み綱や、信頼という意味があるんだ。エリックも、

リレーの最後に入る選手を、*anchor*ということを知っているだろ？」

エリックはそれを聞いたびに、不思議な気持ちがした。なんでその重りがいいんだろう？

確かに、信頼、ということとはわかる。しかし、それなら海を自由に旅をする船のほうが見た目も断然かっこいいのに、と。

今でも、エリックは父が碇型の首飾りを、エリックにプレゼントした気持ちがわからない。

しかし、何故だか碇は好きになっていた。船よりも。彼は首飾りから手を離し、

父と同じ、淵なしの眼鏡を外し、ベッドの上に置いた。

それから、天井に吊るしてある電気を消し、机にデイヴィットから受け取った本を、投げるように置いた。

前までは、テスト前だというのに、本をプレゼントする父の気持ちかわからなかったが、

今ではもう慣れたものだ。これは父、デイヴィットのエリックに勉強をさせるために作戦だ。

デイヴィットが、エリックがもう勉強なんてしない、

と諦めて渡したと思っていたエリックは、

前までは腹が立って、父を見返してやろうと、猛勉強したものだ。

しかし、今ではその父の作戦に気づいているが、どうやら父も、エ

リックがこの作戦に気づいていることに、気づいているようだ。

「親子だな・・・。」エリックは、電気の消えた暗く、

静かな部屋で呟き、苦笑した。

そう、前までは、これはデイヴィットがエリックに対する作戦だった。

少なくとも、この一週間前までは。しかし、今日この本をエリックにあげたのは、作戦なんかじゃなかった。

今日は、父であるデイヴィットが、息子であるエリックに、本をあげただけなのだ。一生思い出に残り、そして嫌いになるであろう本を。

第三章「学校」

第三章「学校」

朝、エリックはまだ深い眠りについていた。昨日はつい寝てしまい、目覚まし時計のアラームのスイッチを入れるのを忘れたのだ。

「起きなさい、エリック。もう八時だ。学校に遅れるぞ。」いつもまでも起きてこないエリックを心配して、

父、デイヴィットがエリックの部屋まで起こしにきたのだ。今日、母のマーシーは、自分の母親の、

つまり、エリックの祖母の面倒を看にいつているのだ。祖母は風邪をひいた、というわけではないが、

今日はいつも祖母の面倒を見ている妹、エリックの叔母、セリーヌが急用で出かけることになったのだ。

そこで一人きりの祖母の面倒を、マーシーは頼まれたのだ。そのセリーヌは今年29歳で、

一回は結婚したが、そのわずか二年後に離婚してしまったのだ。エリックも、マーシーも

理由は知らないが、どうやら夫のクレイブに原因があるようだ。クレイブの居場所は、

セリーヌにしか、わからないのだ。

エリックが、デイヴィットに起こされ、起きてから、二十分が経った。そのころ、デイヴィットはもう

会社へ行っていて、家にはエリック一人だった。エリックは、起きてからすぐに顔を洗って、

リビングへ行った。テーブルの上には、ラップのかかった朝食が置いてあった。

マーシーが作って行ったようだ。デイヴィットは料理ができなく、エリックは彼が料理しているのを、

数えるほどしか見た事がない。それもマーシーが教えながら、だ。いわゆる不器用なのである。

時はもう八時十五分になっていた。グズグズしていたら学校に遅刻する・・・。

エリックは、ほとんど味がわからないほど急いで食べ、家を出た。

エリックの家から学校までは、約二五分で着く。学校は、九時には授業が始まる。

彼は走ったり歩いたり繰り返して、学校へ向かった。学校に着き、エリックが玄関へ入ったときは、もう

チャイムが鳴っていて、ぎりぎりセーフだった。エリックが教室に入ると、エリックの大親友、

アランが話しかけてきた。

「随分遅かったな、エリック。息も荒いぞ。走ってきたのか？」アランは肩まで届く黒髪を撫でた。

アランの隣には、ケヴィンがいて、どうやらエリックが来るまで、二人で話していたようだ。

「ああ、今日、八時に起きたんだ。合計、五分くらい走ってきたよ・・・。」

エリックは息を切らせながら答えた。「たったの五分かよ、エリック。お前ホント、持久力がないな。」

ケヴィンがちやかすようにエリックの肩をたたいた。緑の瞳が小さな子供みたいに輝いている。

髪を切ってきたのか、短い茶髪がもっと短くなっている。「余計なお世話さ、ケヴィン。この前、

三人で僕の家まで勉強しに来たとき、君は何分勉強した？五分ですぐ教科書を放り投げて・・・。

持久力がないのはお互い様さ。」エリックは机に通学鞆をおろしながらケヴィンに言い返した。

ケヴィンはやられた、とでも言うように笑っていた。アランは二人の会話を面白そうに聞いている。

エリックは、勉強はアランやケヴィンよりできたが、スポーツは全くと云っていいほどできない。

球技は、アランとケヴィンにつられてバスケットボールが少しできるだけで、

その他は、走る、投げる、蹴る、全部できない。アランは、勉強はエリックほどはできないが、

そこそこの成績をキープしている。顔も整っていて、スポーツも万能にできる。

特にバスケットボールは、クラス一位で、他クラスとの試合のときにはいつも呼ばれている。

ケヴィンは、勉強こそできないが、スポーツはエリックより良く、なにより、足が速い。

前のクラス的时候は、ケヴィンもいなかったし、エリックとアランの二人で、いつも行動していたが、

学年が変わり、ケヴィンと同じクラスになったときから、アランはケヴィンと仲良くなり、

そこで、エリック、アラン、ケヴィンの三人で行動するようになった。最初、エリックとケヴィンは

あまり話さず、ほとんどアランが中心だったが、時期に、ケヴィンからエリックに話しかけるようになったのだ。

人見知りのエリックは、仲の良いアランと、ケヴィン以外、あまり他の人に話しかけない。

アランは頼りにされているし、女子にも男子にも人気がある。何よりスポーツができる人は、友達が多いものだ。

ケヴィンも冗談を言ったりして、面白く、人懐っこい性格で友達も多い。三人で友達がこの

二人だけというのはエリックだけだった。

話しているところで九時になり、一時間目の始業のチャイムが鳴っ

たので、皆それぞれ、

自分の席に戻った。一時限目は歴史で、エリックはまあまあ好きな教科だった。

歴史のヘインズ先生は、エリックたちのクラスの担任でもあり、昼休み、時間があるときは

生徒とサッカーなどをしたりして、皆から人気があった。なにより、行動的な人で、

毎月、昼休みの時間を利用して、「皆でスポーツ大会」などというものを企画する。

勿論、題名が“皆でスポーツ”なので、ヘインズ先生のクラスの人々は

強制的に参加させられるのだ。スポーツが苦手で、嫌いなエリックには、

かなり迷惑な企画だった。ヘインズ先生は、スポーツが好きな人も、嫌いな人も皆でやって、

好きな人はもつと好きになり、嫌いな人もだんだん楽しくなってくる、というが、

エリックは、これをやることによって、どんどん嫌いになっている。やりたい人だけやればいい、

というのがエリックの考えで、決して自己中心的ということではないが、協調性をあまり

重視する性格ではない。

今、ヘインズ先生の歴史は、丁度アメリカ独立革命のところをやっていた。アメリカ独立革命は、

前の学年のときやったが、より詳しく、今の学年でやっているのだ。歴史は、いつもと同じく、先生がなにかを付け足すと、生徒がつつこんだり、関係ないことを言ったりして、

話がよく脱線し、結局今日も、アメリカ独立革命の所が終わらなかった。

イギリス人にとっては、ここは早く終わらせたい单元だったのだが、

。。

二時限目は数学で、これはエリックが実技（もちろん、体育だ。）を抜き、一番苦手な教科だった。

数学はマクレ先生で、数学だけじゃなく、コンピューターも教えている。

マクレ先生は、細めの男の先生だ。繊細で、細かく注意ばかりしてしている。

なにより教え方が下手で、本当にわかったか、確かめの問題などをやらない。

教えたらずく終わって次の単元、といったかたちだ。これでは、数学が得意になれ、というほうが難しい。

しかし、頭はよく、数学では、次の学年で習うことを少し教えたりするのでためになる。

それにコンピューターの腕もすごい。キーボードは、見ないで打て、ものすごく早い。

わかりにくく、教えは下手だが、中には、尊敬する生徒もいるのだ。

二時限目が終わったら、次は国語で、エリックは、国語が一番得意だった。

国語の先生は、ピアソン先生といって、中年の女の先生だった。面白く、生徒の人気も高いほうだ。

なにより、マクレ先生と違い、詳しく教えてくれるし、わからない生徒が一人でもいたら、

もう一度わかりやすく教えるといった、丁寧な人だった。国語は詩をやり、一人ひとり音読で発表した。

四時間目は体育で、エリックの一番、大嫌いな教科だ。体育はサッカーで、

二組のペアをつくり、パスなどの練習をするのだ。エリックはアラソンと組み、ケヴィンは

ヘンリーと組んだ。ヘンリーはケヴィンの幼馴染で、ずっと一緒に遊んでいたそうだ。

バス練習が終わったら各自、シュート練習をし、最後にゲームをして終わった。

四時限目が終わり、昼休みになったら、エリック、アラン、ケヴィンで昼食を食べた。ケヴィンは、母親が事故でなくなってしまうていなく、弁当ではなく、登校中パンを買い、持ってきていつも三人で食べている。

昼食を食べ終わり、休みに入ったら、三人でバスケの話や、マクレー先生の話などをした。

アランはマクレー先生の、数少ないお気に入り生徒で、よく、コンピュータの話などをしている。

昼休みが終わったら、五時限目の外国語だった。

（エリックとケヴィンはロシア語、アランは中国語をとっている。）
次の時間は

六時限目の科学で、パティックという、高年の男の先生である。

三時、科学が終わり、HRをして、学校が終わった。

エリックはアランと二人で下校をしていて、ケヴィンはヘンリーと帰っている。

アランの家は、エリックの家から七、九分歩いたところにあって、最初に、アランの家が先に着く。

二人はアランの家で別れて、そこからはエリック一人で帰るのだ。やがて、五、六分でエリックは、家に着いた。

第四章「自由な一日」

第四章「自由な一日」

家には、案の定誰もいなかった。エリックは左腕につけている、腕時計を見た。3：45…。そろそろ母、マーシーが帰ってくるころだ。

母さんは確か、4時ごろ帰ってくると言っていたな…。エリックは、昨日の朝、マーシーが言っていた言葉を思い出した。

母さんが4時に帰ってくるということは、叔母、セリーヌが自分の家に帰ってくるということだ。

セリーヌはどこへ行っているのだろう。叔母さんは確か、毎週金曜日は、つまり今日は、会社が休みだったはずだ。

そのぶん、日曜日に行っているのだ。母さんは、急用だって言っていたな…。

急用って、どんな用なんだ？あんなにしつかりした叔母が、自分の姉に母親を

押し付けるようなことするだろうか…。そういえば、先週も、

叔母さんは、友達に会いに行ってくるなどで、出かけているのだ。

普段、祖母の世話に追われている叔母さんに友達か…、一体誰だろう？

エリックはそんなことを思いながら、自分の部屋のドアを開け、入った。

マーシーが帰ってくるまでに、勉強をする準備をしなければ…。

本当はそろそろ、本格的に勉強しなければならないと思っている。

クラスの子も、もう、真剣に勉強をしている。アランも、二週間ちよっと前から

勉強しているのだろう。ケヴィンだってちよこちよこと…、

少なくとも、エリックよりは勉強しているに違いない。

いつもは三人の中で、エリックが一番、勉強を長くしているのに、最近、

勉強に集中できないのだ。一週間ちよつと前くらいからだっけ…。

一週間か…。

エリックは頭に何かが引つかかる思いがした。ここ一週間、なんだか変だな…。

父さんも、母さんも、セリーヌ叔母さんも。そして、僕自身も…。

エリックが、数学の教科書を取り出し、机の上に乗せたとき、玄関が開く音がした。

母さんが帰ってきたか。エリックは然程急がずに、シャープペンとノートを取り出し、

いすに深く腰掛けた。何故だか、もうマーシーに勉強をしていないところを見られても

良いような気がした。しかし、

三十分経っても、マーシーが部屋に入ってこないのです、

エリックは一階の様子を見に行った。リビングには、いない。

エリックは、マーシーの部屋のドアをノックしたが返事がない。彼は少し躊躇してから、

部屋に入った。マーシーは、部屋のベッドに寝ていた。

余程疲れたのか、祖母の家から帰ってから着替えもしていない。

エリックは、起こすか起こすまいか迷った。確かに起こさなかったら、

夕食の作る人がいない。父、デイヴィットは料理が作れない。

しかし、疲れているのに、起こすのも可哀想だ。しかしなによりも、デイヴィットが会社から帰ってくるのは夜中だ。それまで勉強しているフリを

しなくても済むということだ。今日一日、自由にできる…。それに簡単な料理くらいなら、

エリックにもできないことはない。しかし問題は父さんだ。昨日は

外で食べてきたらしいが、いつもそうというわけではない。父さんの分まで、エリックが作ることになるかもしれない。

人に食べさせられるほど、上手くはないな……。第一、父さんが帰ってくるまで、起きてられるだろうか。

昨日だって眠いのを我慢して起きていたのだ。眠ってしまったら、父さんは夕食が食べれない。

ラップでもかけておくか？いや、後々のことを考えると、起こしたほうがいいかも……。

エリックは、そんなことを考えたものの、結局は自由という誘惑に負け、マーシーを起こさなかった。

エリックは夜七時に夕食を作って食べ、それからテレビをみたり、本を読んだりした。

テスト前以外の日と同じふうに過ごしたのに、何故かそれ以上に楽しく過ごせた。

やはり、またいつものように机にずっと向かっているつもりで家から帰ってきたのに、

マーシーが寝て、エリックを監視する役がいなくなったからだろう。マーシーが寝たことを喜ぶのは、彼女に失礼かもしれないが、それでもやはり、

机に向かって勉強せずに済むから良い。いつもならいすに深く座って、

本を読んでいただろう……。エリックは不意に、碇の首飾りを握り締めた。小さいころから、

喜び、興奮、怒り、恐怖等の感情がでたときは、この碇を握り締めるのが癖なのだ。

今は、喜びで握り締めたのか？エリックは自分自身でもわからなか

った。

こういうことは少ないほうではない。碇を握り締めるときは、たいていなんの感情から

碇の首飾りを握り締めたのかはわからない。しかし、今は何故かわかったような気がした。一瞬だけ…。

喜びでも、興奮でも、怒りでもない。…恐怖だ。何故か握り締めた瞬間、恐怖の感情がわいた気がした。

恐怖…なにから？今、恐怖なんて感じているのだろうか…。

エリックは何故かそのことが、凄く大切なことのように思えた。

午後十一時。デイヴィットが家から帰ってきたのは、エリックがリビングで

本を読んでいたときだ。エリックは一瞬ビクリとし、腕時計を見た。もうこんな時間か…。それにしても、今日は帰ってくるのが早いほうだな。

昨日は一時を越えていたっけ。エリックは本をしまい、急いで出迎えに行った。

母さんのことを報告しに行かなくては。

「お帰りなさい。父さん、早かったね。」エリックは昨日と全く同じ調子で言った。

「ただいま、エリック。マーシーは…母さんはどうした？」デイヴィットがエリックに鞆を

渡しながら訊いた。何かを心配しているようだ。「母さんは、四時ごろ、お祖母さんの家から

帰ってきたんだけど…。疲れて眠っちゃったみたい。」エリックは、マーシーの部屋を指差しながら答えた。

デイヴィットは一瞬、不安と安心が混ざったような顔をしてから、エリックが指しているマーシーの部屋のドアを、一回ノックしてから部屋へ入った。

エリックはその間に、隣のデイヴィットの部屋に入り、鞆を置いてきた。

明日は父さんも休みか…。なんだか不思議な感じがした。あんなに忙しそうにしているのに、休みはあるんだな。誰にでも…。

誰にでも…。当たり前前の事なのに、何を考えているのだろうか？自分は。

エリックはデイヴィットの部屋から出て、リビングへ向かった。

デイヴィットはリビングのソファに座っていた。彼はテレビが嫌いなので、

あまりつけない。「エリック、実は夕飯をまだ食べていないんだ…。マーシーが起きていると思ってな。」

デイヴィットはエリックが来たのに気づくといった。作ってくれといわんばかりに。

「仕方ないから僕が作るよ。でも、たいした物は作れないし、美味しくもないと思うよ。」

エリックはため息をついて言った。「構わないよ。腹に入れば何でもいい。」

お前は私と違って、一応ちゃんと料理ができるからな。」
デイヴィットは「一応」という単語を少し強く発音した。

「前、母さんに二人で料理を教わっただろう？」

「お前はなんとか、それなりの味ができたが、私はソースをかけるといわれたのに、

ラー油をかけてしまっただけ。そのミスを除けばちゃんとできていたのに、お前達は二度と

食べたがらなかった。まあ、今作ればそれなりにはできるだろう。機会がないだけだ。

他はたいいていできるが。」デイヴィットは本のページをめくりながらなにとなく言った。

エリックを褒めているのか、言い訳をしているのかわからない。

エリックは、できるなら自分で作ればいいのに、という言葉呑み込んだ。

どうせ仕事で疲れている等の言い訳をするだろう。デイヴィットはクールだが、

そのぶん、ものすごく負けず嫌いなのだ。エリックはその辺はマーシーに似たのでセーフだ。

第一、あの時の料理のミスはラー油とソースを間違えただけではない。形もスゴければ、

味もマズイ。ラー油のかかっていないほうを一口食べたが、アレは料理の一種にははいっていない。

十二時ごろ、デイヴィットは夕食を食べ終わり、エリックに礼を述べて自分の部屋にはいった。

エリックに「おやすみ」という時、エリックの顔をじっとみつめてから、

エリックの胸についている錠をみつめた。

手には、昨日、鞆から出した題名と著者名の書いていない、藍色の布表紙の本を持っていた。

エリックは無意識に錠を握った。

恐怖を感じる…。

第四章「自由な一日」（後書き）

こんにちは。アレスです。

いつもご愛読ありがとうございます。

えゝ、いよいよ次の次の（長）章で小説が本格的に始まります。

今までののはプロローグとして第七章からやっと「ANCHOR」が始まるわけでどうぞ楽しみに？待っててください。

第五章「夢と胸騒ぎ」

第五章「夢と胸騒ぎ」

朝。エリックが起きたのは、午前七時だった。アラームでも、起こされたのでもなく、急に目覚めたのだ。夢の途中に。目をこすって起き上がるとまだ眠い。エリックは必死につきさきまで見ていた

夢を思い出そうとした。確か…、父さんが出てきた気がする。他にもアラン、

セリーヌ叔母さん、叔母さんの元夫、クレイブ。そして見知らぬ青年。夢に出てきた青年は、

穏やかに微笑んでいた。でも、その表情の裏には、悲しみと、切なさが見えた気がする。

セリーヌ叔母さんは…確か…泣いていた。悲痛な声で。そして、誰も彼女を慰めない。

夢に出てきた、エリック自身も。クレイブさんは…どうだったかな…。何か…説教でもするような調子だ。

アランは…。エリックを、哀れそうに見つめていたのかもしれない。いや、怒っていたのか？

そして、父さんは…。笑っていた？泣いていた？どっちだったのだろう。ずっと、ただひたすら、

エリックを見つめていた。父さんの感情は、わからなかった。そして、夢に出てきた、エリック自身の感情も。エリックは、これ以上思い出せない、と

わかるまで、ずっとベッドで考えていた。何か、大切な夢のような気がする。

やがて、七時半。エリックはベットから起き上がり、顔を洗ってリビングへ向かった。

リビングには、父、デイヴィットと母、マーシーが朝食をとっていた。

「おはよう、エリック。」マーシーはエリックが起きてきたことに気づくと、

あいさつをし、微笑んだ。しかしどうやら、疲れはとれていないようだ。目の下に隈がある。

父さんと一緒だな……。エリックはいすに腰掛けた。当のデイヴィットは、

エリックに気づいていないかのように、藍色の布表紙の本を読んでいる。

まだ読み終わっていないのだろうか？エリックは不審に思った。金曜日も、木曜日も読んでいた。

文庫本サイズのあまり厚くない本なのに……。デイヴィットは本を読むのが早い。時間さえあれば、

一日三冊は読める。一冊の、それも文庫本サイズの本に三日間を使ったりしない。

読み返しているのか？一体何の本を……。エリックは題名がないだけに、こういうものか気になった。

しかし、それと同時に訊いてはいけないような気もする、というより、訊くのが怖い。

結局、エリックは訊ねなかったが、デイヴィットがその本を読んでいると落ち着かなく、胸騒ぎがした。

朝食のときも、何度も、碇型の首飾りを握り締め、気を静めた。碇を手にすると、落ち着くはずが、

何度握り締めても、効かなかった。それどころか、碇自身が、恐怖を唆している。

エリックの不安は、その藍色の本だけではなかった。ここ最近、デイヴィットの様子がおかしいのだ。

時々エリックをチラリと盗み見たり、みつめたりする。デイヴィットはあまり人と目を合わせない方なのだが、

エリックの目を、じっと見て話すことが多くなった。淡いブルーのかかったグレーの鋭い瞳で、

自分と同じ色の、まだ鋭くはないが、落ち着いているエリックの瞳をまっすぐと見るのだ。エリックはそんな

デイヴィットの態度ひとつひとつに不安が込み上げてくるのだ。それは、マーシーも同じだった。マーシーも

デイヴィット以上にエリックをみつめてくる。前までとは違う、つかれきった顔で。

ただ、マーシーとデイヴィットの態度が違うのは、この碇の首飾りのことだ。マーシーはそんなことないのだが、

デイヴィットは、毎日エリックの胸に着けている、碇の首飾りを見つめている。

まるで何かを願っているかのように…。

第五章「夢と胸騒ぎ」（後書き）

はい、いよいよ次の次です。

だんだんとエリックはデイヴィットの異変に気づいてきています・・・。

後もう少し・・・でやっと始まるのですw

第六章「忘れぬ日」

第六章「忘れぬ日」

それから、エリックは昼まで勉強し、昼食を食べた。今回は、本当に勉強をしたのだ。

言われてなんとなく机へ向かって教科書を開いたのではなく、いつもの、

つまりここ一週間前の自分と同じく、自分の意思で机に向かい、そしていつもの

試験前以上に勉強をしたのだ。エリックは何故いきなり今になって勉強する

意欲が湧いてきたのか、自分自身もわからない。やはり流石に試験六日目前

ということ、危機感がたのだろうか。それとももっと他の…。

エリックは無意識に

碇の首飾りを握った。??興奮: ? エリックは訳がわからず、もう一度握った。

・・・やはり興奮。昨日は恐怖を感じたのに、今日は興奮を感じた。何故だろう？

自分は何を待って興奮しているのだろうか…。待つて？待つててことは、ソノ

興奮は過去や現在にあったものではなく、未来にある。エリックは自問自答をした。

説明しておくが、なんだかの能力が碇にあり、エリックが握ったら彼に通じて自分

の感情がわかる、というものではない。むしろその逆だ。

自分が一番好きなモノ、つまり、碇を握ることによって安心感を抱き、自分の感情が

理解できるのだ。いや、自分の感情を自分自身に公開できるのだ。もともと、エリックは感情豊かではなく、貧しい方だ。感情の豊かではないエリックは、

自分が今感じている、感情がどういうものかわからないのだ。これをどういうふうに受け止め、

この感情に対して、どう反応したら良いのかわからないため、なにかしらの感情を

エリックが感知したときは、（エリックの場合は胸がざわつく。）

碇を握り、自分の心を

安心させ、やっともう一人の、つまり、エリックの中にいて、エリックを自制してくれる人に

コレは公開しても安全だ、と伝え、やっと自分がどんな感情かがもう一人の別の、

冷静と本当に少しの好奇心というモノを持っているエリックがわかるのだ。

結局エリックは無心のまま、夜まで勉強していた。マーシーがエリックに夕食を食べるよう

言いに来るまでずっと、だ。本当にコレが試験前という危機感だけからきたものだろうか？

エリックは昼間に感じた“興奮”という感情が気になった。彼は普段、興奮という

感情を感じることは極めて少ない。それだけでも彼は心配になったのに、

夕食中にデイヴィットとマーシーの不安と悲しみを表しきった顔でチラチラと盗み見され

ることによって、もっと不安になってきた。マーシーだけならいいのだが、

問題はデイヴィットだ。デイヴィットはエリックと同じで、あまり人前で感情を顔に出さない。

そのデイヴィットが悲しみを浮かべたのだ。今にも涙を流しそうな顔で、しかもエリックをみつめて。

これで心配するな、という方が難しい。マーシーはされ以上に危なく、

今までは本当に泣いてたかのように目が赤く腫れている。その顔をエリックに見せない

ようにするためか、わざとハムエッグに顔を近づけて食べているのがもつと痛々しい。

エリックは何があったか訊こうと何回も思ったが、言葉がでかかったそのときに、

もう一人の自制心を持ったエリックが止めに入るのだ。それもその止めたもう一人の

エリック自身が興奮しているらしいのだ。エリックはどっちに従えばいいか迷い、

結局訊かない事にした。訊いてしまったら本当に泣き出しそうだったし、

もう後には戻れない、と思ったからだ。

夕食を食べ終わったらまた、デイヴィットはあの藍色の布表紙の本を取り出し、

例の寂しく、今にも泣き出してしまいそうな顔で読んでいるのだ。

エリックは言い知れぬ不安を感じ、はやばやに部屋へ戻った。

…もし、もしあの時、デイヴィットに訊いていたら、全てがまるく収まったかもしれない。

あの時、馬鹿なことを考えるな、と言、言っていれば。

エリックはこれから何年も、そのことを悔やんでも悔やみきれないほど後悔するのだ…。

部屋へ戻ったエリックは、自分の部屋を眺めた。何故そんな事をしたのか自分でも

わからない。ただなんとなく、なのだ。一通り見回したとき、机の上に乱暴に置かれた本をみつけた。

デイヴィットがくれた、茶色の本だ。【ANCHOR】その本の上には大きく、そうタイトルが書かれてある。その下に碇の絵。エリックの胸に着けている碇の首飾りに似ている

絵だ。エリックはその本を大事そうに抱え、自分のベッドの中に潜り込んだ。

碇の首飾りを強く握り締めて。それからエリックは浅い眠りについた。

真夜中。エリックの家の周りには少しも灯りが漏れていなかった。エリックの家にも。

エリックは自分の部屋のドアが開くのに気づいた。誰かが入ってくる。

エリックは誰が入ってきたか確かめたかったが、

身体が動かない。眼も開かない。金縛りというヤツか…。エリックは仕方なくそのまま、

誰かが近づいてくる足音に耳を澄ましていた。その人物は足音を忍ばせ、エリックのベッドに

向かった。エリックは碇が触れられるのに気づいた。碇に触れた後、エリックは優しく

頭を撫でられた。その感触でエリックはすぐにデイヴィットだとわかった。

エリックは話しかけたかったが口も動かない。やがて、自分の顔に涙が落ちてくるの

に気づいた。どうやらデイヴィットが流したらしい。エリックは突然哀しみが湧いてくるのが

わかった。碇を握らなくてもわかるなんて…。エリックは自分自身

に驚いたが、

それよりもデイヴィットが何故泣いているのかが気になった。
やがてデイヴィットは自分が大粒の涙をエリックの顔に大量に流していることに気づき、

ベッドの上に置いてあったティッシュでそつとエリックの顔を拭いてから、

静かに部屋を出て行った。エリックはデイヴィットが出て行ってしまつと、突然

眠くなつてしまい、もう一度眠りについた。

確かにエリックの家の周りには灯りが少しも漏れていなかった。
だが今は、エリックの家自体が、充分すぎるくらい灯りを灯しているのだ。

炎という、暗く、触ってみれば熱いが、心の眼だけでみるととても冷たく見えてしまうような

灯りを。エリックがこの灯りに気づくのは、これから数分もかからない。

彼はだんだん煙の匂いがしてき、眼が涙ぐんできたのだ。それでも逃げたくても逃げれず、彼は今起こっている状況を把握さえできていないのだ。

ただ、彼は絶対に離さなかったのだ。父がくれた【ANCHOR】という名の本と、

銀色に輝く碇の首飾りを。絶対に。

これがエリックの、一生絶対に忘れられない一日となつたのだ……。

第六章「忘れぬ日」（後書き）

いよいよ火事が起こりました。

これからが「ANCHOR」の始まりです。

15歳のエリック少年は、父がくれた、二つの
anchorを持って自分の実の父に復讐を誓います
。

第七章「不可解な火事」

第七章「不可解な火事」

エリックは鼻にツンと異臭を感じたのがわかった。それだけじゃない、

鼻から口に異臭がきて咳き込みそうになったが、

金縛りのせいか、それもできない。やがて、パチパチという激しい音が耳に聞こえ始めた。

それと同時に、鼻にくるツンとした異臭がどんどん強くなってくるのもわかった。

そして、眼がにじむのも。くらくらしってきたエリックの頭でも、コノにおいがなんなのかは

わかった。煙だ。金縛りにあつてはいても、煙の刺激のせいで咽そうになる。

それがやりたくてもできない…。だめだ…、煙が体中にまわって来たのがわかった。

苦しい。肺がしめつけられたような痛さ。閉じている眼にも、ズキンズキンという刺激が

き、どんどん涙が溢れてくるが、それを流すことさえできない。肺が痛い…むせる…。

やがて、エリックの寝ているベッドが焼けてくる。ダメだ…火を消すどころか、逃げることも

できない。もう…絶えられない。のたうちまわりたい程苦しいのに、それでもできない。

これ以上は無理だ…。僕は死んでしまうのか？エリックは逃げられないという、絶望の中

で感じた。苦しい、苦しい、苦しい…。死にたくない…助けてくれ！エリックはあらん限り大声で

叫んだ…つもりだった。が声が出ない。やがて、火の音が自分の耳の

すぐ近くに聞こえてきたとき、もう助からないのだとわかった。死の間際を実感した。僕はこれから死ぬんだ…。

死にたくない、といったものの、何故か死を怖がっていない自分に気づいた。もうどうせダメだ…。

エリックは絶望という名の炎の中でも絶対に胸の碇の首飾りと、父がくれた【ANCHOR】という本を

放さなかった。絶対に…死んでも放すものか。エリックは死の間際で初めて「死んでも…」という言葉を使った。

そのとき、エリックの部屋の扉が勢いよく開く音を耳にした。彼の意識はその瞬間に遠退いた…。

……ここ…どこ？エリックが起き上がってまず発した言葉がそれだった。

だがその声は、自分の声とは思えない程掠れていた。さっきの煙のせいだろうか…。

エリックはさっきの火事を思い出した。ちゃんと、それこそ怪しいくらいに正確に覚えている。

あの煙、あの苦しさ…。思い出すだけで吐き気が催してきた。で…ここは何処なんだ？眼を開いてはいないものの、雰囲気とこの臭いで自分の家ではないこと

くらいわかった。物凄く薬くさいのだ。さっきの煙よりはマシだけど…。？さっき？そういえば、

あれからどれくらいが経ったのだろう…。一時間？一日？それとも一週間？エリックはくらくらする

頭で考えた。実際火事するときよりは楽だがやはり気持ち悪い。まず、時計を見ないと…カレンダーも

あるといいのだが。エリックはゆっくりと目を開けた。瞼が重い。それでもなんとか開けたら、

眼が涙ぐんでいた。エリックは左手でそれを拭くと、ゆっくりと起き上がった。身体は動くらしい。

彼はゆっくりと部屋を見回した。頭と眼がくらくらするがなんとか、一通り見回してみた。

白、白、白。なんにもかも真つ白な部屋だった。これで正確にエリックの部屋でないことがわかった。

時計は…、あった。これまた白い時計。その時計は短い針が9を、長い針が5を指していた。

9：25か…。問題は午前か午後か、だ。時間を確認してからもう一回部屋を見回した。カレンダーは

ないようだ。エリックは仕方なくまたベッドに横たわった。時間はわかったが日にちがわからないエリックが

今すること、それは自分の身体の状態を把握することだ。残念ながらこのくらぐらの頭では自分の状況などを

考えることはできない。使えない頭で考えるよりまず、自分の状態を調べることにした。

エリックはまず手を動かした。長い間の金縛りのせい、手が少し固まっていた。

だが、動かすことはできる。当分ベッドから起き上がれなさそうだから、足はまだ良い。次は眼だが、

眼は開けられた（というより今も開けている。）から良い。残るは口と耳だ。まず耳を確認することにした。

エリックはベッドの鉄格子のところを手でたたいてみた。手は痛かったが幸いカン、とう音が聴こえた。

耳が終わると最後は口だ。まず簡単な単語から発音してみたが、やはり掠れている。エリックは何度も

せきをしながら発音したおかげで前よりはマシになってきた。口はokとするか…誰もいないのだし。

エリックは取り合えず自分の身体に異常がないことがわかった、安心して胸にある碇の首飾りを

握った。 つもりだった。 碇が…、 ない！ エリックは声にならな
い奇妙な程掠れた声で叫んだが、
その声は低く、そして小さかった…。

第七章「不可解な火事」（後書き）

今日は更新送れてすみませんミ（o—）o z z z
これからが本格的に始まるので
ご愛読よろしく願います。

第八章「白い部屋での会話」

第八章「白い部屋での会話」

エリックは絶句とともに身体全体を見回した。服が着替えてあった。紺色のベストから青いパーカーに変えてある。ズボンもベストと同色の

紺から、白に着替えてあった。エリックはすぐにパーカーとズボンのポケットを調べたが錠はない。

彼の顔は序々に青褪めてきた。エリックから錠を取るということは、潔癖症

の人からハンカチと手袋をとると等しいことだ。エリックはゆっくり立ち上がった。

身体が重い……。いや、軽いのか？自分の身体の状態がわからないのだ。

具合が悪く、吐き気がするが休んではいられない。

エリックはベッドの近くの白い鉄製の机を調べた。しかしみつからない。エリックが絶望に浸された時、

もうひとつの紛失物に気づいた。もう一つの anchor……。父からもらった本。

エリックは完璧に蒼褪め、重病人の様な顔になった。彼はふらふらした

身体で部屋中を探したがみつからなかった。探し始めてから十五分後。

あまりのだるさにベッドに腰を下ろしたとき、この白い部屋の、ベッドの右側にある

ドアから足音が聞こえるのがわかった。それも大勢の。彼は咄嗟に隠れようと

したが、この白い部屋ではその場所もない。エリックは仕方なくそのままベッドに

上に座っていた。碇のない彼にはもう何も考えられない。

ドアの前で一回躊躇するような態度をみせてから、ソノ人達はノックもなく

入ってきた。エリックはすぐに数を数えた。一、二、三、男が四人だ。

先頭は五十後半と思える男。四人の中では一番年上の者だ。

そのすぐ右には二十中間の若者。濃い緑色の眼が鋭く光っている。とても若者とは思えないほどの余裕がある。

その後ろには短い黒髪とそれと同じ黒い瞳の背の高い若者。前の緑色の眼の

男と同じく二十中間の男だ。整った顔と黒髪からエリックはアランの顔を思い浮かべたが

雰囲気がどこことなく違う。その男はエリックと眼が合うと二重の瞼でウインクをしてきた。

エリックはウインクを返す余裕もなく彼と眼を逸らし、彼のとなりのさっきの二人と

同じ二十中間の男に眼をやった。茶色の瞳で二重の瞼、髪は肩にギリギリつかないくらい、

つまり、丁度エリックと同じくらいの長さだ。エリックと眼が合うと、ウインクまでは流石に

しなかったが、恥ずかしそうに微笑んできた。これも微笑み返す余裕がなく眼を逸らした。

先頭の五十中間の男にもう一度目をやった。エリックの眼が自分のほうに来たこと

がわかると、ソノ厳しそうな顔をもう少しあげ、エリックをみつめてから

口を開いた。「エリック、マックガフィン、君がこの病院にきてから二日間が経った。」

男は唐突に言った。エリックは返答に困り、黙った。「君の家に火事が起きてから、

ということになる。」「男は、エリックがなにも言わないので続けた。
「君の持ち物は極僅かで
二つしかない、偶然にも二つとも碇だ。」「男は口元を歪めて嘲笑う
ように笑いながら
エリックの碇の首飾りと、父がくれた【ANCHOR】の本を取り
出し、具合が悪く、
蒼褪めた顔で困惑しているエリックの顔の前で掲げた。
。

第九章「対立、そして対立」

第九章「対立、そして対立」

エリックは不愉快な気分になった。

誰だって自分の大切なモノを気安く触られるのは嫌なものだ。「それ、返してください。」

エリックは顔を上げて言った。「駄目だ。君の所有物でコレだけが燃えなかった。まあ、

君の所有物以外なら他にも燃えなかったものが一つあったが、とにかく、

コレは一応調べてから改めて君に返す。」男はエリックの声が物凄く掠れていることに

驚いた顔をしてから言った。ソノ男の態度にエリックは苛立つてきた。

ただでさえ具合が悪いというのに碇を返してくれないなんて……。「お願いします、僕それ

ないと困ります。その碇は あ、首飾りのほうです。ソレは僕にとって大切なものなんです。

それがないとパニックを起こしかねません。」エリックは困ったような顔で言った。

凄く子供っぽい言い訳で、騙されるわけがないことくらいエリックにはわかっていたが、

他にいいようがない。案の定、男はエリックを見下すような顔で言った。「ほう、

パニック……例えばどういうふうにだね？」エリックはソノ言葉を聴くと不審に思った。

声の調子が、「どういふふうに」「というより、」「これくらいで、」「という感じだった。

まるでもつと悪いことがあるみたいに……。エリックはしょうがなく答えた。

「本当です、僕にとってソレはただの首飾りじゃないんです。それに、僕小さいころ……。」

？エリックは言葉に詰まった。というより自分が何を言おうとしたのか忘れてしまった。

「小さいころ、なんだね？」男はエリックが言葉に詰まると挑発するように訊いてきた。

なんで忘れたんだ？小さいころ確かナニかがあったはず……。エリックは返答に困った。

その少しあと、腕時計を見てから、男の隣の緑色の眼の若者が男に耳打ちをした。

「ストウービング警部、そろそろ行かなくては……例の件を調べないと……。」

エリックと話をしていたストウービング警部と呼ばれた男は、もつとエリックを甚振れなかった事を残念そうに思いながら「そうだな、だが……、

バティック、アレは少し調べたいことがあるから後日回すと言っておいてくれ。」

ストウービング警部は急に何かを閃いたかのように言った。

それからもつたいぶるような仕草をしてからエリックが座っているベッドに、一冊の

本を投げ、置いた。一同が驚いたように顔を歪め、蒼褪めた。バティックと呼ばれた

緑色の眼の男は少し驚いたような顔になったが、すぐに何事もなかったかのように

また無表情になった。「警部……！ソレは総監に渡して調べてもらわなくてはなりません！」

エリックに微笑んできた茶色の瞳の若者が少し躊躇ってから言った。「レザック！」

今は彼に見せるほうが賢明だ！何時までも黙っていられると思っているのかね！？」

ストウービング警部がまるでコレを待っていたかのように怒鳴った。その眼には

憎悪が浮かんでいた。「しかし警部、総監はすぐに調べるから持ってきて来いと…、

それに、まだ彼に見せるには、意識もハッキリしてはいないみたいですし…。」

レザックは反対したが声はじょじょに小さくなっていった。「レザック、君は一警官の

分際で私に反対するといふのかね…、それとも総監の甘い意見の方が、

私の意見より賢明だと言うのか？」ストウービング警部が「甘い意見」という言葉を

強調し、レザックを睨んだ。レザックは尚も反対していたが、警部は耳をかさずに、

エリックを睨んでから、ベッドにエリックと本を残したまま部屋を後にした。

第十章「火事の疑問」

第十章「火事の疑問」

エリックは呆然と彼らが出て行くのを見守った。当分ドアから眼が離せなかった。一体なんだったんだ？警部ってことは…、警察ということだ。

エリックは頭を整理するために、次々と自分自身に質問をした。何故警察がココに来たのか。ソレは火事が起きたから。

僕の家…。ソレは認めなくてはならない事実だ。

次に此処は何処か。此処は病院。そして、最大の謎。何故両親が来ないか？

答えるのが怖い…。普通なら親が息子の様子を看に来るものだ。でも一向に

現れない。ソノ理由は。エリックはすぐにその疑問と、そしてソノ最も適切で

ある答えを振りほどいた。そんな事はない、絶対に。エリックは頭をふると、不意に

目線がストウービング警部が置いていった本に移った。藍色の布表紙の本…。

何処かでみたことがあるような…。エリックは暫くソノ本をみつめていた。

？？布表紙…、火事が起こる前、父さんが…、読んでいた本だ！エリックは絶句した。

全く、ソノ本は燃えていなかったのだ。何故…あんな火事が起きたのに。

いや、きっとコノ本は父さんによって何処かに厳重に保管されていたのだろう…。

金属の何かに…。エリックはすぐにソノ疑問を振り払った。両親が

来ないのは何故か

という疑問が浮かんだときと同じく。しかしソレと同時に二つの事を思い出した。

じゃあ僕の身体には何故火傷の後がない？僕が持っていた本は

何故燃えなかった？エリックは寒気がしてきた。父さんの本が何故燃えなかったかは、

嚴重に保管をしていたのだ、と納得できる（あくまで自己納得だが）。しかし、自分

のコトは無理だ。自分は何故火傷を負っていないんだ？確か、僕が意識があつたときは、

火は自分のすぐ目の前までできていたはずだ。エリックは繊細に火事の記憶を思い出すこと

ができた。あんなに目の前まできたのに、火傷をしていないなんて…直接火が触れていないにしても、

熱気で火傷くらいは負うはずだ。いや、第一、直接火が触れないのがおかしい。

ベッドが燃えていたのに、何故本が、そして身体が焼かれない？

あの火が僕の前までくるのには、時間がかかった。異常に…。

しかし、もし掛かったとしても、碇は鉄製だからわかるが、本は…いや、きっと自分の勘違いだ。火が自分の前までくる前に、

きつと助けがきたのだ。きつと…、エリックはまたもや疑問を振り払った。

今は何も考えたくない。ただでさえ色々なことが起きて精神が参っていると言つのに…。

エリックはコレ以上何も考えないため、そして自分の新たな疑問から逃れるために、

もう一度ベッドに横になって少し眠りことにした。

此処は何処だ…？エリックは暗闇の中で呟いた。エリックが眼を開

いた場所は、

只々真つ暗闇だった。誰もいない。急に気分が悪くなった。気持ち悪い…、吐き気が

催して来た。エリックは急いで公園の公衆便所に駆け寄った。一つの個室のトイレに

体中のものを吐き出す。しかし、本来でる食べ物がでず、水と汚物（食べ物でも

汚物なのだが）だけだった。彼はコレ以上でないことがわかると、まだスツキリは

しないが、公衆便所の手洗い場に行き、蛇口を捻り、口を濯いだ。？蛇口に血が

ついている。硬い、どす黒い血。最初からついていたのだろうか？だが

血はこびりついてはいなく、つけられたばかりだった。嫌な予感がある…。

エリックはゆっくりと自分の手を顔の前にやった。眼を恐る恐る開く。

「ウワアアアアアアアア！！！！」彼は声にならない悲鳴で絶叫した。

この世のものとは思えないような、冷たく、汚らしい声で。

第十章「火事の疑問」(後書き)

やっと十章までこれました！

これから何十章もいくと

思いますのでよろしく願いします。

第十一章「火事の謎、そして答え」

第十一章「火事の謎、そして答え」

エリックが眼を覚ましたとき、体中に物凄い量の汗を掻いていた。青いパーカーが

ぐっしり濡れている。…嫌な夢を見たものだ。エリックはすぐに忘れようとした。

机の上に置かれている水差しに手を伸ばし、透明の無柄のコップに水を注ぎ、

一気飲みをした。一気に飲んだせいか、身体が一瞬冷えたが、汗はとれなかった。

エリックはまた寝るのが怖くて、そのままベッドに座っていた。暫くしてから、

コップを戻し、またベッドに座ろうとしたとき、アノ藍色の布表紙の本に、手が触れた。

エリックは一瞬ビクツとした。本を手にとってみる。やはり何処も焼かれた後はない。

デイヴィットが持っていた状態と同じだ。彼はゆっくりと頁を捲った。

【死すも訪れしとき、全ての信頼を失った男は一つの蔵書を手にす。】

その本の第一頁には、そう書かれてあった。短い文だったが、すぐに覚えられる

ような独特の文字で書かれてあった。それも手書きで。布表紙に手書きか…、

一体いつにできたんだ？エリックは疑問が浮かんだがそのままつぎの頁に眼をやった。

【彼が彼の地に現れし時からその運命は果てし決死され、彼はその

運命を

呪う。彼を他とりし時、彼は絶望に被いやれ、死を待機する。彼を身とりし時、

汝が絶望に被いやれ、意思の行方を遮られ、死を待機する。

我に汝の願を報堵する時、汝は全てを手放し、壺つを得る。然し、失敗に終し時、汝は全てを失い、壺つを消し去る。尚、その行為を選べし

時、彼は丈夫の体を得、無償を得る。汝が望むあらし、汝は頂の葉を取りし、

そして汝の死守すべきものを、彼に渡堵する。これ等の行為をふまえし時、

汝の全てのものを焼き払い、または殺落する。

この行為を終し時は、彼のことを忘却せず、何時も汝の頭に焼きつくこと。」

その本はそれで終わっていた。実際はもっと頁数が多かったが、残り十字架と、

主、イエス・キリストが描かれているだけで、文はそこで終わっていた。

エリックはもう一度読み返した。普通の少年なら、なんのことかわからず、

すぐに本を投げ出し寝るであろう。しかし、エリックは違った。忍耐力があり、

更に身体に力がない代わり（自分で言うのは悔しいが）、頭にたくさんあるのだ。

彼がまず眼につけた言葉。それは、【我に願を報堵する時、汝は全てのものを手放し、

壺つを得る。】という文と、【汝の全てのものを焼き払い、】だ。

デイヴィットはこの本をずっと読んでいた。全てのものを焼き払う…、

火事…。デイヴィットの全てのものは、家族、仕事、財産。仕

事をなくすのはごく簡単で、

やめればいいことだ。家族と財産は…、家族は殺せばいい、財産は捨てればいい。

その二つを同時に、しかも手っ取り早くできる手段は…、ヤキハラウ。

ヒヲオコセバイダケダ。エリックの脳裏に、答えが浮かんだ。

とても簡単で、そしてとても残酷な答えが。嘘だ…！そんなわけがない。

でもデイヴィットの最近の態度は…。いや、馬鹿かお前は。父さんがそんな事を

するわけがないだろう？そんな行為ありえない。考えてみるよ、父さんはきつと

今僕と同じこの病院に入院してるんだ。僕の病室にこれないのは、僕より危ない

状態であるから、ただそれだけだ。

僕は火事のショックで被害妄想をしているだけなんだ。

エリックは自分に言い聞かせた。でも…、

じゃあ、あの警察の態度はなんだ…。まるでエリックが考えていることが

事実のように、レザックという男は、本を置いていくのを必死にとめていた。

警察は、デイヴィットが生きてこの病院にいるかどうかはわかってるはずだ。

もしこの病院に父がいるのなら、そんな馬鹿なこと考えなかっただろう。…しかし、

それを真に受けるということは、父さんは、それに、父さんは火事が起きた

日の夜、僕の部屋に来て…、涙を流した。暖かい大粒の涙…。

いつもの冷静で無表情なデイヴィットからは考えられないような…。

ま、さ、か……。ホウカハンハトウサン。

。

エリックの脳裏にまた簡単に、残酷な答えが浮かんだ

これが、エリックの人生を多いに捻じ曲げた地獄の始まりだった。
いや、もしかしたら始まってさえいなかったのかもしれない。

第十一章「火事の謎、そして答え」(後書き)

やっとここまで書き上げた…。

(前回も言いましたがw)

これからはスムーズ(?)に頑張ります。

物凄く長くなってしまったらすみません…。

第十二章「警察署での喧嘩」

第十二章「警察署での喧嘩」

レザックは一人、夕方の警察署を歩いていた。

正確に言えば、周りには数人の同僚警官がいるのだが、彼は別のことを考えていたため、目に見えていない。

別のこと、とはエリックのことだ。昼間あった時から彼のことが忘れられないのだ。

もう、アノ本を読んだのだろうか…。レザックの脳裏によぎるのは何時もその言葉だった。

それだけが気になって仕方がない。やはり、あの時、ストウービング警部の反対を

押し切って本を取り上げるべきだった。そう後悔したと同時に、彼の顔に自嘲的な表情

が浮かんだ。反対を押し切って取り上げる？僕にそんな勇気があるものか。

気が弱いんだから。仮に今、またあの時に戻ったとしても絶対に反対できるものか。

「レザック！」突然の呼び声と肩を叩かれた衝撃に思わずレザックは廊下に仰向けに倒れてしまった。

今まで上の空だったレザックの頭は混乱状態で此処が警察署だということも忘れ、拳銃を

取り出した。素早く（と言うよりは慌てて）出した拳銃をソノ者に向ける。

「落ち着けよ馬鹿、俺だよ！」男は顔をサラツとした黒髪を上げた。

「ラルフ…、脅かすなよ」

レザックはフラフラと身体を起こした。少しの時間だったのに、汗がびっしょりと掻いている。

「驚いたのは俺だよ、頭狂ったんじゃないのか？拳銃なんて…、此

処を何処だと思ってるんだよ？」

ラルフはレザックの構えたままの拳銃を顎でさした。怒っているような口調だが顔がにやにやしている。

レザックは途端に恥かしくなり、周囲を見渡した。皆こつちを面白そうに見て笑っている。

馬鹿だ……。何やってるんだ、警察官が肩を叩かれただけで床に哀れに倒れ、その上警察署で

同僚に拳銃を向ける始末だ。自分にとことん呆れてくる。

「最高だったぜ、今の慌てぶり。ストウービング警部が見てればどんなに愉快か。俺じゃなくて

警部が良かったな。」ラルフは尚もにやにや笑いながらレザックの拳銃を持ち、彼の拳銃入皮に

拳銃を突っ込んだ。「警部に言うなよ。」レザックは恥かしくて顔を下げて

拳銃をちゃんとしまうふりをしながら小さい声でそれだけ言った。

「いや、もう遅いかもな。」ラルフは顔から笑みが消え、レザックの後ろを指した。

警部か！？レザックはゆっくりと恐る恐る後ろを見た。

警部ではなかった。アストアス、だ。濃い緑色の眼をした余裕のある顔の男。

アストアスはレザックと眼が合うと、嘲笑うような顔をした。実際に鼻で笑っている。

アウト　！昔々、小学生のとき人数が足りなくてでた野球の地区試合を思い出した。

あの時は滑り込みセーフだと自分では思っていたが、実は足が遅く、完璧アウトだった。

あの時は確かおまえが野球をやるなんて、と興奮し、会社を休んでまで来た父と、

優勝した時のため、と化粧を濃くしていた母の二人が来てくれたっけ……。なんて事を言ってる場合

じゃない。アストアスが来た、という事は警部にバレる。なんとつてアイツは最低最悪の同僚だ。

ふとアストアスを見たとき、アストアスだけじゃなく、もう一人の男が彼と話しているのが見えた。

いや、話しているんじゃない、掴み掛かっているような…。

見覚えがあるな…誰だろう？レザックは色々な出来事のおかげでよく回転していない頭で

彼らのことを観ている事に決めた。……！ラルフだ！レザックの頭は回転が早くなってきた。

「ラルフ、やめろ！」レザックは喧嘩している彼等の元へ駆け寄った。

何回も言っているが此処は警察署だ。同僚同士の喧嘩なんて、それこそストウービング警部に

知れられたらお仕舞いだ。レザックは彼等の所へ行く間際、周りの警官をみた。

皆観て見ぬふりをして通り過ぎていく。薄情な奴等だな…。レザックはふとそう思ったが、

コレは仕方のないことだ。もし止めにでも入ったとしたら周りに喧嘩に参加しているなどと

思われ、警部に密告されるだけだ。レザックはやっと彼等の所に追いついた。

随分の距離だ。なにしろ廊下が長い。

「お前、今レザックを笑ったよな…。」ラルフはまだアストアスの首元をつかんでいる。

アストアスが今度はラルフを嘲笑った時、ラルフが拳を彼の顔の前まで持っていた。

今にも殴りそうだ。「私だけじゃない、他の者も笑っていた。第一君も笑っていただろう？」

アストアスは流石に怯えたのか、口元から笑いが消えた。「他の奴等や俺はお前みたいな

嘲笑的な笑いはしなかった。「ラルフは首元をさらに強く引つ張り、少し上に上げた。

アストアスは何も応えなかった。「よし、レザックの事を、それと勿論コノ事は誰にも言わない

と誓うのなら許してやるよ。」ラルフは冷静を取り戻し、言った。

「誰にもって、ストウービング警部

の事だろ？さあどうかね…。まあ警察署で喧嘩を起こすとなったら君の処罰もあるだろうからね…。

警部は君達の事を良く思っていないみたいだし。」アストアスはゆっくりと発音した。

君の事を良く思っていない、ではなく、君達の事を良く思っていない、と。

ラルフはまた掴み掛かった。手をすぐにアストアスの顔の前に出し、殴りかかる寸前だ。

「やめろ、ラルフ！彼の言ったとおりだ、喧嘩なんて起こしたら処罰が酷くなる。

殴ってしまったえばお仕舞いだぞ！…、彼の言ったとおり僕らは警部に嫌われている。」

レザックはラルフの手を押さえながら言った。ラルフはレザックの言葉に同感したのか、

アストアスの首を乱暴に離した。「今回は特別に見逃してやるが、レザックの言葉がなかったら

俺はお前をぶん殴ってたぞ。」ラルフは冷静にアストアスをみて言った。

「ふん、警部が怖いかな、今回は、じゃなく一生殴れないさ。警察官をやめれば

別だが。」アストアスはしわのできた首元を直しながら言った。

「アストアス、今度は警察署外で会ってゆっくりと話でもしようじゃないか。」

レザックはまたもや殴りかかろうとしたラルフを抑えながら言った。

三人の負け惜しみの言葉が、アストアスはラルフの言葉、ラルフはレザックの言葉が、
そしてレザックはアストアスの言葉がそれぞれの頭の中で木霊した。

第十二章「警察署での喧嘩」(後書き)

期末テストが終わったので更新です。

これからも続けるのでよろしくお願いします。

第十三章「心配事」

第十三章「心配事」

「待てよっ、レザック！」もう夜になりかけた警察署の廊下で、ラルフが、早足で歩いていくレザックを追いかけている。レザックはさらに

早歩きしたが、（警察署なので迂闊に走れない）ラルフは足が速く、すぐに

追いついてきた。肩を乱暴に掴まれ、仕方なくレザックは足を止めた。

「何？」わざとつけはなしたように言っただけだが、やはりレザックの本性で

その声は弱々しくなる。「何って…、なんで怒ってんだよ？」ラルフがやっと

レザックの肩から手を離し、真っ直ぐとレザックを見つめた。黒いきれいな

瞳と整った顔で自分を真っ直ぐと見てくると友人同士なのに緊張してくる。

思わずレザックは眼を逸らしてしまった。「怒ってないよ。でも、ラルフおかしい

んじゃないか？警察署で喧嘩なんて起こして…、ストウービング警部にバレたら

終わりだぞ？アストアスが絶対バラすよ…。」レザックは心配そうな顔で言った。

「確かにバレたらヤバイだろうけど…、大丈夫さ。それにアイツが悪いくらい。」

レザックは肩を竦めた。だが眼を見れば絶対に心配なんだってことがわかる。

「バレたら…やめさせられるかも知れないよ…なんで喧嘩なんてし

たんだよ？

後の事が考えられなかったのか？」レザックが顔を伏せて言った。またわざと

厳しい口調で。「なんだよ…、俺、お前が馬鹿にされてたからついカツとなつて

やったんだぜ…。」ラルフが悲しそうな口調になつてきた。いつもとは全然違う。

「そんなの、わかつてるよ…。僕だつて嬉しかった、ラルフが僕の事想つていてくれて…。」

つい涙声になつてしまった。だが、それは心の中の本音であつた。ラルフが自分がどうなるかわかつていてもアストアスに自分のために立ち向かつてくれた

事が凄く嬉しかった。しかしそれで嬉しいなんて言つたらあまりにも自己中心的だ。

僕が迷惑をかけたんだから、ちゃんと厳しい口調でそんな事してほしくなかった、というように

怒ればラルフはもうそんな事はしないだろうな。それを後悔したが、あのまま怒つて

ラルフを失うのはやはり寂しい。それも充分自己中心的だよ…。」

「レザック、ごめんな。」ラルフがいきなり謝つて来た。「えっ？ああ、うん。」

レザックは慌てて応えた。今まで自分の心を覗いていてついぼつとしていた。

「お前…、別の事考えていただろ。」ラルフが軽く睨んできた。

「違うよ、同じことだよ。あと、喧嘩の事僕が悪いから、こつちこそごめん…。」

レザックは言い訳をし、すぐに謝つた。「いや、俺のほうこそ悪かつたよ。」

じゃ、俺たち終業時間過ぎたからそろそろ帰ろつぜ！俺先着替えてくるから。」

ラルフは片手をあげレザックを残して更衣室へと向かっていった。
一つ事件は解決し、安心したのだが、まだ心にはモヤモヤが残っている。エリックの事だ。
やはりまだ心配でたまらない。彼はちゃんと寝ているだろうか…、
本は読んだのか。
レザックが家についても尚考えているのは、エリックの事ばかりだった。

第十三章「心配事」（後書き）

二章連続でエリックが登場してきませんでした…。

o r z

次回は多分登場させるので待っててください！

第十四章「寒い朝の目覚め」(前書き)

レザックの章が二話続き、エリックが出てこなかったので、エリックが出ていたところの第十一章の話をします。

第十一章粗筋
父デヴィットが持っていた藍色の布表紙の本を読んだエリック。

ソコには、所謂、「たった一つの願望を

叶えるには、全てのものを捨てる」と書かれていました。エリックはソノ本を読み、父デヴィットが放火したのでは、という考えが浮かびました…。

第十四章「寒い朝の目覚め」

第十四章「寒い朝の目覚め」

クシュン！エリックは自分のくしゃみの音と、この寒さに目が覚めた。

起き上がるとベッドの掛け布団が下に落ちている。なんとという寝相の悪さ、

というわけではなく、気味の悪い悪夢をみたからだ。印象の強い夢だったのに、

それがどんな夢なのか全く覚えていないのだ。覚えているのはただ一つ、

夕方の暗い薄気味の悪い建物の一室、だということだ。それと…、クシュン！エリックは二度目のくしゃみが出た。冬のイギリスはかなり寒いものだ。

エリックは床に落ちている布団を拾って自分の身体に掛けた。15歳のエリック

にとってその掛け布団は小さめだったが、この際文句も言ってもらえない。

エリックはそのままベッドに横たわった。前寝ていた位置からかなりずれているものの、

動いて元の場所に戻るなんて寒くてできない。既にエリックの細めの腕には鳥肌が幾つも

たっていた。エリックはそのままずっと固まっていたら、だんだんと自分の体温がベッドへ

移り、前よりは寒さも退いてきた。時期にやっとベッドから起き上がれるようになり、

することもないので、ずれていたシーツを元の状態に戻すことにした。五分かけて

シーツを直し終わったとき、やっと落ち着いてベッドの上に座ると、

吐き気は治まってきたが、

肩が異常に凝っていることに気づいた。今まで寒さの事ばかり考えていたので、自分では

気づかなかったのだろう。エリックは首をまわして痛みを和らげることにした。

首をまわすとコリコリといい音がする。それから、首を自分の手で優しくマッサージした。

マッサージし、肩のコリが大分良くなったとき、ベッド前のスライド式の窓に眼をやった。

開け放したカーテンから大量の日差しが降り注いでいるということは、朝か昼かの

どちらかだ。エリックは夜でないことがわかって少し安心してきた。さつきみた

あの悪夢はなんといつても夕方の景色だったのだ。なので夜や夕方ではなく、朝や昼のほうが

良い。エリックは外の陽をみていると、急に外へ出たくなってきた。外へでたい、と思ったのはエリックにとっては珍しいことだった。

内気なエリックは外で皆と遊ぶより、家で本などを読んでいるほうが好ましいことなのだ。

それに、外は怖いモノが多い。今は大分良くなったが、小さいころ、
？まただ。

忘れているというより、その記憶がない。これ以上が続かないのだ。今僕が思ったのは一体なんだったんだ？前五人組の男がコノ

白い部屋に入ってきたときも、言おうとしたことを思い出せなかった。

何故か、ソノ時言おうとしたことと、今考えたことが同じ気がする。いや、多分同じ

なのだろう。じゃあ何を言おうとしたんだ？エリックはソレを考えると

胸がむかむかし、考えたくなってきたので、またベッドに横た

わることにした。

掛け布団をあげ、なかに潜り込もうとした時、ベッドサイドの上に一冊の本が置いて

あるのに気づいた。藍色の布表紙の本。アノ本だ……。寝ていたので忘れてしまった

ので考えていなかったが、やはり現実のコトだったのか。やはり父さんが。

エリックはソノ本をみると胸のむかむかが激しくなり、ソノ本を無意識にベッドの

後ろに激しく投げた。ソノ本は、哀れに床に開かれたまま落ちてしまった。

エリックはもう一度窓のほうを見て、ゆっくりとベッドから起き上がって、コノ部屋をでるため、

ドアへと向かった。ドアへ向かったとき、アノ本が、十字架が大量に描かれている頁を、

見せしめのように開かれているのをエリックはチラリとみた。しかしソノ本の方へは

向かわず、真っ直ぐとドアへ向かい、白色のドアをゆっくりと開け、白い部屋の外へ

でた。そこには鉄製の白い廊下が前へと続いていた。ソノ廊下を少し進んだとき、

またしても白い扉から看護師と思しき白い服の着たショートヘアの若い女の人が出てきた。

エリックはソノ女の人のところまで行き、ゆっくりと言った。

「あの、ココの外へ出たいんですけど。」

「

第十四章「寒い朝の目覚め」(後書き)

やっとエリックが登場です。

次は第十二話、十三話と同じく、レザックが主にでてくる章ですが是非読んで下さい。

第十五章「食堂で」

第十五章「食堂で」

「さつきから何考えてんだよ？」イギリス、ロンドン市立病院の食堂で

ナポリタンを注文したものの、一口も手をつけずに物思いにふけている

レザックに、彼の同僚のラルフが、レザックのただ前を見つめている顔の前で指をパチンと鳴らしながら訊ねた。「えっ何が？」レザックはビツクリして

眼を現実世界へと戻した。「いや、こっちが質問してるんだよ…。

お前

昨日からずっとソノ調子じゃん。」ラルフは呆れた様に言った。

「その調子って？」レザックは訊いた。だが本当は、ラルフが何を訊きたいのかわかる。

でも、言ったら呆れられそうなので言わないのだ。「惚けんなよ、昨日から何

考えてるんだよ？ずっと上の空で…。恋でもしたか？」ラルフはにやにや笑いながら

訊いてきた。「別に…、ちょっととした考え事さ。」レザックはなんでもないかのように

言い、ナポリタンをラルフの前に押しやった。ラルフは押し付けられたナポリタンを

手に取り、「Thank you」（ありがとう）と礼を述べ、ナポリタンを頬張った。

レザックは彼がナポリタンを頬張っている様子を観察した。

時々思う、彼くらい格好が良くて顔を良ければ言うことないのにと。

ラルフは何をしていても格好良いのだ。レザックとラルフは警察学校の同期で一緒にずっと勉強をしてきたのだ。警察学校での学生時代の時きも、ラルフはレザックよりも凄く女性から人気があった。だが、付き合ったことは一回もないらしく、何回も

愛の告白を受けていたが、いつも断り続けていたらしい。（本人証言）

ソノラルフに告白した中には、レザックが心を寄せていた女性もいるのだ。

しかし、何故交際を断ったのか訊いても、ラルフは絶対に答えてくれなかった。

美男って良いよな……。得だよなあ……。ラルフは男性からも女性からも人気があるし……。

レザックがそう思うときいつもラルフに抱く感情は嫉妬ではなく、羨ましさと尊敬だった。

「で？考え事って何だよ。」ラルフはナポリタンを頬張りながら訊いてきた。

「だから大した考え事じゃないよ。」レザックは顎を手で支えてちよっとクールっぽく

してみた。もしかしたら格好が良く見えるかもしれない。なんといつても自分はいつも

ラルフの近くににいるのだ。周りは比較しているに決まっているし、レザックとラルフを

比べたら絶対皆ラルフに眼が行く。だから少しでも格好を良く見せたかった。

「嘘つくなよ、俺、お前が何考えているか大体はわかるぜ。」レザックは黒い瞳を光らせて言った。

「じゃあ 何考えているか当ててみてよ。」レザックはそのままの

姿勢で言った。

「俺の美貌についてだろ？」ラルフはコーフィーを啜りながら何となく言った。「ハッ？」

レザックは一瞬何を言ってるのかわからなくなり、惚けた声を出してしまった。

「ハッって…、まあ冗談さ。……アノ子の事だろ？」ラルフはズバリとあてた。

「アノ子って？」レザックは惚けた。「アノ病院に居た子。火事にあつた…、

エリライグだっけ？」「エリック。」レザックはすぐに指摘した。

「ああ、そうそう。なんだやっぱ彼の事なのか。」

ラルフはにやり、と笑った。「アノ子の何処が気になる？ストウービング警部に

逆らった事か？まあアレには俺もビックリだな。物凄く勇ましい子だ。

俺も見習わないとな。で、そのことか？それともアノ藍色の布表紙の本が…。」

ラルフは口を噤んだ。「実際に何処が気になるって事じゃないけど…、

なんだろ、何か彼の事が頭から離れないんだ。」

レザックは正直に答えた。「おつ、恋か？ソノ人の事を意味なしにずっと考えるって事は

恋してるってコトらしいぜ。」ラルフが茶化した。「馬鹿言つなよ…、でもよくわかったね、

僕が彼の事を考えているって。」レザックはラルフの言葉を軽く受け流した。

「ああ、だつてお前、アノ子の病室にいたとき、ずっと彼の事を見ているからさ。

それに、あの藍色の本を置いていくのを止めただろ？まあ確かに俺も反対だが。

しかし、ストウービング警部には逆らえないよ。しかも臆病なお前が反論するとは…、

だから思っただんだよ、コイツ、余程エリック少年の事が気になってるんだなって。」

ラルフはまたコーフィーを嚙りながら言った。「臆病で悪かったね…。」レザックは

ゆっくりと椅子を引いた。「悪かった、怒るなよ、その代わりお前に特別招待券を

やるよ。」ラルフは帰ろうとしたレザックに慌てて言った。「特別招待券？」レザックは

怪訝そうに訊いた。「そう！ところで君はアノエリック少年と話をしたくないかね？」

ラルフは急に偉そうな態度で訊いた。「うーん、まあ…。ちょっと話をしてみたいな。」

レザックは椅子に座りなおした。「だろう！実は今日、ストウービング警部から

エリック少年について頼みごとをされたんだ。」ラルフはもったいぶった口調で言った。

「頼みごと？」レザックは興味深げに訊いた。

「アノ子が病院の外へ散歩したいんだとよ。で、無論アノ弱々しく心の

痛んだ少年を一人で外へ出したら何をするかわからない。そこで彼の付き添いを

ストウービング警部に頼まれたんだ。」ラルフは眼を輝かせて小さく呟いた。

「なんだって？」レザックは嬉しそうに訊いた。「なっいいいだろう？」ラルフは黒い瞳で

レザックにウィンクした。「でも一つ条件があるんだ…。」ラルフはさっきの態度とは

打って変わって暗い声を出した。「条件って？」レザックはラルフ

の口調に心配になって訊いた。

「警部に言われたんだ。実はエリック少年に

アノ火事の事を話さなくてはならない。

勿論本の事も。」

第十五章「食堂で」（後書き）

第十五話、後書きの修正です。

第十五話修正前の後書きには、

「次はいよいよ

エリックとレザックの交流の章です。

読んでみてください。」と書かれていましたが、

都合により、交流シーンを第十七話に回したいと思います。

私の頭考ミスで十七話に回してしまったことをお詫び

申し上げます。――

今後このようなミスをしないよう気をつけますので

よろしく願います。

今後も【ANCHOR】を是非ご愛読してください。 > (――“)

<

第十六章「待ち合わせ」

第十六章「待ち合わせ」

朝。

AM9:00。やはり寒い。

エリックは腕時計を見ながら、自分の付き添い、所謂、監視役が来るのを待っていた。

ソノ者との待ち合わせの時間まであと十分。

エリックは今待っている人が誰なのかわからない。ただ警察官、というのは確かだ。あと、昨日、白い部屋にきたアノ五人組の一人だ、という事も。

女看護師から伝えらのは、前あなたの病室に来て話した、ラルフ・ジョースキー

さんがこの病院の外庭で九時十分に迎えに来るからね、だけだった。あなたの病室に来て話した、と言っても、実際エリックはアノ、碇の首飾りと、

父から貰った【ANCHOR】という題名の本を取り上げたストウービングとかいう

警部としか話していない。他の三人は名前を何回か聞いたかも知れないが、

誰が誰かは全然覚えていない。なので、ストウービング警部ではないのは確かだが、

他の三人の誰が来るのかは全くわからない。

遅い、エリックは苛々してきた。約束の時間はまだ過ぎてはいないのだが、

この寒さと、火事の被害者である筈の自分が待たされていることに

苛々していた。

大体、付き添いなんていらなかった。自分が外へ出たいと思ったのは、気味の悪い

寂しい病室から出たいことと、外の空気が吸いたいただけだ。別に変なことをしようなどとは

考えていない。一人で外を散歩していただけなのだ。それなのに警官が付き添って

くるなんて…、最低だ。またアノ、ストウービング警部みたいな奴なのだろうか…。

それともわざと優しく接して、前のお父さんの状況はどうだった、お父さんはどんな人

だった、暴力を振られてはいなかった等と誘導尋問してくる警官なのだろうか。

エリックにとっては両方嫌だったが、誘導尋問してくる方は一々答えなくてはならない

ので、どちらかと言うと前者の方が良いかもしれない。

エリックはもう一度時計を見た。9：08。約束の時間まで後二分。

「ハア……。」エリックは長い溜息を吐いた。

ち、こ、く、だ。レザックは心の中で叫んだ。

肩に付くか付かないかの髪を手で溶かしながら、

左腕に付けているデジタル腕時計を見た。9：12。

なんて火事の事を報せれば良いか悩んでいたのと、ラルフのかなりの外的な応援を聞いていた

御陰でこんな時間になってしまった。

レザックは慌てて制服から私服へと着替えた。

警官の制服を着たまま散歩だと周りの人が不審に思うだろうし、エリック少年が嫌がるに決まっているからだ。

着替えが終わるとすぐに病院の更衣室を出た。

本当は走って外庭へ猛ダッシュしたいところだが、病院の中なのでそうもいかない。警察署も病院もどうして自分の居るところは走る事

ができないんだろう……。頭にそんな疑問が過りながらも、レザックは外庭へ早足で向かった。

第十六章「待ち合わせ」(後書き)

昨日は爆睡で投稿

できませんでしたorz

今度からは毎日投稿するので

ヨロシクですミ(〇ー)(〇zzzz

第十七章「朝の公園」

第十七章「朝の公園」

「ごめ…んね、待たせて、寒かった、よね…？」走ってきて息が切れているレザックが途切れ途切れに言った。

「いいえ…。」エリックは何か言わないといけない、と思い、短くそう答えた。実際寒かったが、はい、とも言えずにいいえ、と答えたのだ。「ごめん、ちょっと待っててくれないかな、息が…、整うまで…。」レザックはゆっくりと言い、膝に手を付き、息をゆっくりと

吸った。エリックはそんなレザックの様子を観察した。

この人がラルフか。茶髪に二重の瞼、髪と同色の茶色の瞳…なるほど確かに見覚えはある。昨日、ストウービングという警部が、エリックにアノ悪魔の様な藍色の布表紙の本を置いてく事を、必死に拒み続けていた若者。本を置いていくことを拒んだ、ということ

はエリックに本を読ませたくなかった、つまり父が放火をしたのだと悟らせたくな

かった、という事だ。イコール良い人、かもしれない。

それでもやはりエリックは自分の散歩に誰かが付いてくる、という事が

気に食わなかった。

「ごめん、もういいよ、えーと、何処行こうか…？」レザックは顔を上げて

エリックに訊いた。「えーと、ラルフさん、僕此処がどこかわかりませんし、

どんな所があるかも知りませんので…。」エリックはコノ人、喋る

たびに

謝るな、と思いながらも遠慮がちに言った。

するとレザックは顔を赤くし、手で髪を撫でた。「ああ、ごめんね、えーと、此処はロンドン市立病院で…、うーん此処の近くには…、あっ！

僕の名前はラルフじゃなくて、レザック「アージェンだよ。あー、ラルフ」

ジョースキーの同僚で、彼が…えーと、急用で来れなくなったから代わりに

来たんだよ、よろしくね。「レザックはそう言ってエリックに手を差し出した。

エリックは怪訝に思いながらも自分の顔の前にある手を握った。

「此方こそ宜しく願います、アージェンさん。ええと、御存知だと思いますが、エリック「マックガフィンです。

この度はご迷惑をお掛けしまして…。「取り敢えず丁寧に返事を返す。

レザックは今時の少年にない丁寧さに驚き、ご迷惑をお掛けしまして、

という部分に苦笑し、エリックが立っているところの後ろを指し、言った。

「えーと、取り敢えず近くの公園へ行こうか。朝だし、あまり人が居ないと

思うから…。「はい。「エリックはそう短く答え、公園へ向かった。

ソノ公園は結構広く、犬を散歩させている老人と、分厚い本を読んでいる

青年が居るだけだった。

「取り敢えずあそこのベンチに腰を掛けようか。」レザックは公園に着くとすぐに

真ん中の噴水の近くの茶色の木製のベンチを指差した。

エリックは素直に従い、ベンチに腰を掛け、暫く広い公園を見渡した。

すぐ前には綺麗に水を放っている噴水。エリック達が座っているベンチの斜め後ろには、冬のせいか、枯れている木が数本。

コノベンチの斜め右のベンチの下には、誰が置いていったのか、バスケットボールが

置いてある。ソノベンチの前には高めのバスケットゴール。

「何か食べるかい？朝は何も食べていないと訊いたけど…。」エリックが一通り

眺め終わると、レザックが横から声を掛けてきた。「いえ、何も食べたくありませんので…。」

エリックは膝の上で、左腕の関節を右手で支える様に握りながら言った。

遠慮ではなく、事実何も胃に入れたくなかった。「そうか…、なら暫く

此処に座っているかい？」レザックは優しく訊いた。「はい、すみません…。」

エリックは下の乾いた土を見詰めながら小さい声で謝った。

その十分後、レザックは重く口を開いた。

「そろそろ、話をしなきゃならない…、あー、君の家に起きた、

家事の事で。

エリック君、君は、ストウービング警部が置いていった、

アノ藍色の布表紙の本を読んだかな…？」

。

エリックは左腕を右手でさらに強く握った

第十七章「朝の公園」（後書き）

更新です（ 、 、 ）（ 、 、 ）

いよいよエリックとレザックのまともな？

会話（というより説明w）が始まりますw
感想、評価ヨロシクですw

第十八章「切り出せない言葉」

第十八章「切り出せない言葉」

「……いいえ。」エリックは短く、感情をこめずに
そう、嘘をついた。

「三日前の深夜、君の家が家事になった。

僕たち警察はまだソノ事を君に伝えていなかった。」

レザックははつきりとそう言ったものの、

顔はずっと下を向いている。「本当に残念な事で、君の家は
跡形もなく焼けてしまっている…。」レザックは辛そうに言った。
エリックはなんと云っていいのかわからず、「そうですか…。」
と一言言った。まるで他人事みたいに。

レザックはその冷たい口調に驚いたが、すぐに顔を伏せ、
話を続けた。「実は…、とてもつらいことだと思うけど、

コノ火事は、ただの誤りではなく、放火の可能性があるんだ…。」

レザックは唇の渴きを満たす為、舌で唇を一舐めた。

「そうですか。」今度もエリックは、他人事のような口調で言った。
自分でも驚く程の冷たい声で、それも前よりハッキリと。

普通なら自分の家が放火されたというのに、こんな冷たい他人事の
ように言っるのはおかしい、と疑うが、レザックはそれどころではな
く、

両手を握って話を続けた。「ソノ放火犯は間違っただけでしまった
のかも

しれない…。酔った勢いで誤って火を付けた可能性もある…。だが
…。」

レザックはゆっくりと話した。ダメだ…、コレ以上は話せない。

しかし、そんなレザックとは裏腹に、エリックは苛々してきた。本当にしつかりしていないな、コノ人。ハッキリと言っちゃえばいいのに…。

こんなことなら、ストウービング警部に来てもらったほうがマシだったかも。

アノ人ならきつと、君の家を放火したのは、どうやら君の父親、デイヴィット・マックガフィンという可能性がある、と。

エリックは何気なく思ったただけだが、実際にデイヴィットが放火したのだ、と

思うと、胸がしめつけられそうになった。 碇の首飾りがほしい…。

レザックはそれからもずっと言葉を切り出さなかった。

ただ、エリックに残念だった、とか放火犯誰だろうね、なんて馬鹿らしいコトを言っているだけだった。

そんなレザックにエリックは業を煮やし、「あの、ストウービング警部さんが没収した、僕のアノ碇型の首飾りありますか？」と、訊いた。

レザックはすぐに我に返り、ジャンパーのポケットからすぐに碇の首飾りをだし、

エリックの手に握らせた。

今日、ストウービング警部に返してきなさい、と

言われ、すぐ返すつもりだったが、どうやって放火のコトを伝えようか

悩んでいて、ずっと忘れていたのだ。

「ありがとうございます。」エリックは碇の首飾りをつけながら礼を言った。

「えっ何が？」レザックはドキツとした口調で言った。

自分が無意識に火事のコトを話してしまったのでは、と思ったのだ。

「首飾りを返してくれて…。」エリックは呆れながら言った。

レザックは短く「ああ…。」と答えたきり、また黙りこくってしまった。

十分後。エリックは、コノ空気に我慢できなくなつて、
とうとう恐ろしい言葉を口にした…。

「あの、もしかして、

僕の家火をつけた放火犯は、僕の父ですか…？」

第十八章「切り出せない言葉」(後書き)

一日に二話投稿です。

アメのちクモリと同じです…w

感想・評価ヨロ(*・・)(*)(*| |)(シクですw

第十九章「涙と共感」(前書き)

プロローグ最終章です。

第十九章「涙と共感」

第十九章「涙と共感」

ば、か、だ…。あんな事言うんじゃなかった…。

エリックはついさっき発言した言葉を後悔した。

父さんが放火犯なんて…、思っただけでも胸が締め付けられ
そうなのに…。

言葉に発したら…、想像以上につらいつて事、

知らなかったのか…？

僕は…

なんで…、あんな事言っただろう。

黙っていれば良かったのに…。

僕って実は物凄い馬鹿なんだな…、

ホラ、レザックさんも驚いてるじゃないか。

レザックは考え事をしていたため、

空耳が聞こえたのかと思った。

きっとそうだ…、そうに違いない。

もしかしてって思ったけど、まさかエリック君が

もう、ソノ事に勘付いているなんて…、まさか。

「アノ…、本を読んだ…、の、かい…？」レザックは震えながら
訊いた。何故かわからないが、自分が激しく怒っているのに
気づく。

「……はい。」エリックは数十秒後、素直に答えた。
前と違って、ソノ声には冷たさがなかった。
「じゃあ…君は…嘘をついたのかい？読んでいないって…、
僕、に…。」レザックは途切れ途切れに言った。
顔が強張る。

ハハハ…、父親が自分の家に放火なんて…。
聞けば可笑しい話だ…。コノ人もなんで
こんなに顔が固まっているんだ？

面白くて仕方がない。笑えよ、面白いじゃないか。
今度、アランとケヴィンとの話のネタにでもするか。
可笑しくて仕方がない。

デモ、ジブンノメニ、ナミダガタマツテイルノハ、ナゼダロウ。

エリックは涙は絶対に見せたくなかった。
父さん…、に、教わったじゃないか、
ヒトの前でやたらと感情を見せるな、と。
エリックはすぐに碇の首飾りを強く握った。
寂しさ、辛さ、悲しみ。色々な感情が混ざっている…。
涙をためている胸の苦しさに、必死に耐える。
ジャナイト、ココロガカラダカラハナレルカラ。

レザックは身体が何処も動かなくなった気がした。
自分の体が自分のではないような。

ラルフ……、来てくれよ……。

心が、掛替えのない友に助けを求めている。

何故だろう……、自分にはコノ哀しみに……、
耐えられない……。

何故だろう。会ったばかりのただの子供に、
何故自分は、彼と共感しているのだろう。

心が壊れる……。エリックは無性に逃げ出したくなった。ソトへ。
此処じゃない、本物のソトへ。

「レ、ザッ……、ツクさん……、ソト……、ソトへでたい……。」
エリックはしゃくりながら言った。

レザックはソトへでたい、と言っているコノ少年を見詰めた。

「ソト、でたい……、ソトへ……でたいっよおっ……。ソトへ
連れて……、くれる、ってっ、言った、じゃっん……。」
エリックはしゃくりながらソトへでたい、ソトへでたいと
まるで壊れたロボットの様に言った。

レザックは涙が頬に伝うのがわかった。
ずっとソトへ出たがっている哀れな少年。
僕が彼にしてあげられるコトは。

「ソトっ、でった…、いつ…。ソット…でっ…」

「…わかった…、外へ連れて行くよ。」レザックはゆっくりと呟いた。

エリックは
顔が暖かい布に覆いかぶさるのに気づいた。

エリックは涙が一気に流れてくるのがわかった。
レザックの胸に、涙はどんどん溜められていた。

レザックはずっとエリックを抱きしめた。小さな、神に家族を奪われた少年を。

碇を握りしめるコトでしか

哀しみと寂しさを耐えられなかった十五歳の少年は、初めて他のモノで哀しさを忘れられることに気づいた。

ヒトという、頭の悪い非力な人間が…、

もう一人のヒトという、弱く、出来損ないの人間に助けられることができるコトに、エリックとレザックは初めて気づいた。

ヒトは、一人だけでは無力だけど…、
もうヒトりの人間が加われれば、

もっと無力で、馬鹿な人間になるのだ……。

ANCHOR プロローグ【THE avenger
for mile】終

第十九章「涙と共感」（後書き）

やっとプロローグが終わりました！

長かった！wで、第二十章からは、

第一部【The an oath avenge】です。
どうぞ長いお付き合いをw

第一部：第二十章「復讐の誓い」

第一部【The an oath avenge】

第二十章「復讐の誓い」

昼。何時かはわからない。アノ朝の公園からは、レザックのずっと付き添ってもらいながら帰ってきた。

エリックはベッドから起き上がってすぐは、ずっと放心状態になっていた。父が放火をしたのだ、と完全にわかったからだ。

エリックはレザックとの別れ際に、母さんは生きているの、とレザックに

訊いた。レザックは、ずっと黙っていた。顔を伏せ。

その態度で、エリックは母さんは死んだのだ、とすぐにわかった。

沈黙が答えになったのだ。

また、父が行方不明だということも知らされた。

家族も家もなくなってしまったエリックは…、放心状態にいるしかなかった。

これからどうすればいいかわからない。

放心状態のはずのエリックに、自分自身が残酷な疑問を投げかけてくる。

【父さんは、家族を殺してまで何を望んでいたのだろう。】

アノ藍色の布表紙の本は、まだベッドの近くに投げっぱなしになっている。

もう、生きる希望がない。

これからどうやって生きればいい？

なんで自分がこんな事になる？

実の父に裏切られ、母は殺され、たった独りの生き残りの僕が、一体これからどうやって生きていけばいいんだ？

【死ぬしかないのか…？】

僕はひよつとして、この世に居てはならない者だったのだろうか。だから神様はこんな残酷な罪を与えたのだろうか。

エリックは涙を流したくても流せなかった。こんなに苦しいのに、何故か

涙がでないのだ。

今、笑うのと泣くのどっちが楽か訊かれたら、絶対笑うだろう。

レザックさんがほしい。来てほしい。僕をコノ病院に残してほしくない。
僕の苦しみがわかるのはレザックさんだけだ。

ずっと放心状態。

ずっと

ずっと

そんなエリックに 神は もう一つ 辛い疑問を ブツケタ。

【誰が悪い？】

エリックはソノ疑問の答えを探した。

答えはすぐにでた。 何度考えても同じ答え。

【父さん。】

そう、父さんだ。 僕は悪くない。

何故僕はずっと放心状態だったんだ？僕は悪くないのに、

全てはアイツのせいなのに…。

アイツは母さんを殺したんだ…、僕を裏切ったんだ。

僕から全てをとったのだ。

アノ本には、自分の全てをすてる、と書いていた。そして、
たった一つの願望を叶えられる、と。

【じゃあ何故僕まで全てを捨てさらわれなければならなかったんだ？】

全てアイツのせいだ。

アイツが僕から奪ったんだ。母さんを。家を。そして、父を。

【殺してやる】

復讐は悪くないんだ。自分のためにやるのではない、
母さんの仇^{あた}打ちだ。

エリックはそつと碇を握った。前まであった悲しみは消えている。

そして小さな碇には、もう一つの感情がある。

【怒り、だ。】

エリックはもつと強く、これ以上にないくらい強く、碇を握った。

【アイツに、復讐をしてやる。】

アイツは僕と母さんの命を奪ったんだ。

アイツを僕は殺してやる。アイツから全てを奪ってやる。

まだモウ一つ、アイツは奪われていないのがあるはずだ。

【肉体】

アイツから肉体をも奪ってやる。アイツがやったのと同じ方法で。

エリックはベッドの近くに落ちている藍色の本をみつめ、更に強く碇を握った。

【アイツが死に、この世から消え去るまで、

僕は死なない。主よ、僕はアイツに一生の復讐を誓う。】

エリックは碇を右手で握りながら、左手で十字を切った。

最初は額、次に胸、次に右肩、最後に左肩。

エリックは一生、コノ復讐を忘れない。一生

。

第一部：第二十章「復讐の誓い」（後書き）

いよいよ第一部始まりです。

長かったような短かったようなw

これからも長い付き合いになります
がご協力くださいw

第二十一章「養子と施設」

第二十一章「養子と施設」

大丈夫だろうか…。レザックはずっとエリックのコトを考えていた。

父親に裏切られ、母親が死んでしまつて…、

絶望に浸されているだろう。

別れ際の彼には生気がなかった…。

本当はずっと彼のそばにいたかったが、

それもしようがない事だ。

ストウービング警部に彼と会う時間を決められたのだ。

二十分。

少なすぎる。実際エリックとレザックが話し合つてた

時間は三十分以上で、帰ってからストウービング警部に

長時間の説教が食らつた。

それでもレザックは後悔していた。

もっと怒られてでも、彼と話すべきだった…。

「おい、どうだった？」ラルフが心配そうにレザックの顔を覗き込む。

「……何が？」答えるのが辛くて、レザックは恍けた。
「何がって…、エリック君のことだよ。当たり前だろ？」
ラルフは苛々と訊いてくる。

「彼は気づいていたよ…。僕が犯人は君の父だって言う前に言ってきた。犯人は父だろう、って…。」
レザックは悲しそうに言った。自分が情けなくてしょうがない。
「そう…なのか…。勘の良い少年だな…。」ラルフは固まった表情で言った。

「なあ…、彼はこれからどうなるんだろう…？」
レザックは目の前に居る、ラルフに訊いた。
「どうって…、身内が居ないんだから…、施設じゃないのか…？」
ラルフは答えにくそうに言った。「施設って…、叔母さんがいるんじゃない
じゃ

ないのか？」レザックは縋り付くように訊いた。
「叔母はいるみたいだけど…、面倒が看きれないって…、
ホラ、彼の叔母は、エリック君の祖母の面倒を看ているみたいだから…。」

レザックは頂垂れた。

施設へ入るなんて…、両親を亡くして只でさえ心が痛んでいるのに、その上施設に預けるなんて…。彼から希望とともに、自由まで奪ってしまうのか…。

「なあ…、ラルフ、エリック少年は養子になればいいんじゃないかな…？」

レザックは少し考えて唐突に言った。

「えっ？あつ…、養子、ね。でも、養子なんて簡単になれるものじゃない。引き取り人が来るまで等分施設暮らしだろうな…。」

「養子って…、誰でも良いのか？」レザックはラルフの言葉を遮って訊いた。

「誰でもってわけじゃないだろうな。まず、金にゆとりがないと。物凄い金持ちってわけじゃなくてもいいけど、取り敢えずアノ少年がちゃんと暮らしていけるくらいの金はないと。」

ホラ、あの年だから学校も行かなくちゃならないからな。」

ラルフは考え考えに言った。

「そうか…、僕の給料では…、無理…かな？」レザックはゆっくりと訊いた。

「えっ？お前…引き取りたいのか…？」ラルフは信じられないという風に訊いた。

「ああ…だって、彼を施設に預けたくはないんだ。ラルフだってそ

うだろう？」

レザックは当然、というように言った。

「確かにそうだけど……、まあ、いいんじゃないか！金は確かに少々足りないけど……、市から援助も来るだろうから。学校くらいは大丈夫だろう。」

まあ彼にはあまり贅沢はさせることができないが……、勿論おまえもな。

でも、エリック君本人と、叔母さんの承諾ができれば大丈夫さ。

叔母さんなら多分大丈夫だろう、逆に喜んでくれるさ。」

ラルフは希望に満ちた顔で言った。

「エリック君の承諾は……、取れるかな……。」レザックは心配そうに言った。

「大丈夫だろう、お前等仲良くなったんじゃないか、公園のコトでそれにお前と一緒にどんなに最悪でも、施設よりはマシってもんさ。」

ラルフはお前と一緒に最悪、という余計な一言を加えて言った。

「そうだな……、よし……！ あ……、でも、ストウービング警部は了解してくれるかな……。」

レザックはまたも心配そうな顔になった。

「本当に心配性だな……。大丈夫だよ、本人と叔母とお前と市が承諾していれば」

ストウービング警部なんていらねえよ。」

ラルフはニカツと笑った。

綺麗な笑顔だ、と一瞬レザックは見惚れ、すぐにラルフと二人で市役所へと向かった。

第二十二章「争い」

第二十二章「争い」

コツコツ……。エリックの病室の真つ白の部屋に響く音は、幻聴でも霊の仕業でもなく、数人の足音だった。エリックがその音を聞くと、誰が来たのかはすぐにわかった。看護師は大抵二人だし、こんな荒い歩き方はしない。恐らく数日前の男達だろう。

エリックは眠いし、今は誰とも話したくなかったので、寝たふりをする事にした。

コンコン……。二回ノックの音。

エリックは布団に潜り続けようとしたが、そのノックの音を聞いたとき、

気が変わった。潜っていても何ればるだろう。

「……はい。」静かに返事。

男達は名乗りもせずに入り、そのままエリックの寝ているベッドの前まで来た。

……やはり。見覚えがある。

数日前の男達だ。

当然、ソノ中には、昨日のレザックという男も居る。

エリックは絶対目を合わせぬよう、ずっと白い床を見詰めた。

数秒後、真ん中のストウービング警部が咳をし、エリックに作り上げたような声で語る。

「ウウン！えー、彼から聞いたと思うが、四日前、君の家には火事がおき、

……両親も残念ながら亡くなってしまった。」

…亡くなつた？エリックは耳を疑った。嘘をつくな。父さんは亡くなつたんじゃなく、

逃げたんだ。そして、母さんはアイツに殺されたんだ…。

「単刀直入に言う。今の君には両親もいない。君の叔母も、君の祖母の面倒に追われ、君の面倒まで看れない、という。そこで君を施設に入れることにしよう。ロンドンの……。」「施設だつて…？エリックの背に、絶望が押し掛かつてきた。それ…じゃあ、アイツに復讐をすることができない。恐らくもう、アランや、ケヴィンにも会えないだろう。

それから数分、重い空気が流れた……。

「あの…警部。私が、彼を引き取ります。昨日、市からも了解を得ました。

彼の叔母からも。」

おずおずと、レザックが前に出る。

なんだつて？エリックは驚き、つい顔を上げてしまった。

「なんだつて？」ソノ声はエリックじゃなく、赤い顔をした、

ストウービング警部だ。彼の顔でわかる。恐らくレザックさんは警部に言つて

いないのだろう。

「君は勝手に決めたのかね？…第一、彼の教育費はどうするんだね？君の

今の給料ではとても……。」

「ソレは大丈夫です、市から援助も来ますから。彼の叔母からも来ます。」

レザックはストウービング警部の言葉を遮った。

エリックに心配を掛けたくないためだ。

「だが…彼の了解が…、エリック君本人の。」

ストウービング警部は尚も食い下らない。

そんなに僕を施設へ送りたいか……。しかし、そうしていると復讐なんてできるもんじゃない。

エリックは俯くレザックのほうを見、口を開いた。

「僕、大丈夫です。彼と…レザックさんと暮らします。」

今度はレザックが驚き、エリックのほうを見る。警部の舌打ちが部屋に響く。

レザックの後ろにいるラルフが、エリックに親指を立て、ガッツポーズをする。

エリックは流石に、心の中に怒りを溜め込んでいるストウービング警部のまえでは

ガッツポーズを返せず、そのままラルフを見詰めた。

アストアスが一人、そんな彼ら五人の様子を冷静に見詰めている。

第二十二章「争い」（後書き）

はい、更新です。

よければ感想・評価を！

第二十三章「五年後」強い意志」

第二十三章「五年後」強い意志」

あれから 五年の月日が流れ、エリックはもう、
青年になっていた。

それでもエリックは、父への復讐を忘れてはいなかった。
それどころか強くなっていた。

レザックとの関係もうまくいっていた。

しかし、まだレザックには、父の復讐を強く望んでいることを
言っていなかった。

そう、デイヴィットはまだ、消息不明なのだ。
表では。

しかし、エリックはわかっていた。

デイヴィットが生きてこの世にいる、と。
勿論、居場所も薄々わかっている。

それでも、父の元へ行った事は一度もなかった。
少なくとも今までは。時がくるまで、行くつもりはなかった。

アノ藍色の布表紙の本を、ずっとエリックは持ち歩いていた。

“同じ復讐”をするのだから。

アランには、父の事も、そして復讐の事も言っていた。
協力してくれるのだ。

ケヴィンも。

四年前、アノ藍色の本を読み直したとき、復讐には
もう一つ大切なものが必要だ、と書いていた。

デインの石

というものだ。

これは、復讐をするとき、全てを失うが、この、デインの石が
あれば、大切なモノを一つだけ守ることができるのだ。
大切なモノが、コノ石を握っていたら、助かる、という。

デインの石は、火事の時、エリックの部屋で見つかった、という。

それをエリックは、ストウービング警部が誤って置いていったので、くすねたのだ。
ストウービング警部は、石がなくなったことを不思議そうにしていたが、
そんなに気にしなかった。

この石は、考えた末、アランに握らせておくことにした。

最初、レザックと迷ったが、アランはエリックとずっと一緒に居た、
無二の親友だ。

抵抗はあったが、仕方がない。どっちかが死に、どっちかが生きる
のだ。

今日は、アランとケヴィンに、復讐の会議、いや、エリックがこの五年間考え続けてきた、復讐の実行を、今日、行くと、言いに行くのだ。

今日、とは、すぐだった。

彼らの考える時間を、エリックは与えなかった。

時間は与えない。

もう迷わない。

今日、復讐を実行する。

今日、父は死ぬ。

父だけじゃない、ケヴィンも、レザックも

死ぬ。

何も罪がないのに。

ケヴィンはずっと一緒に居、エリックの親友だ。

復讐も、よくよく考えた末、了解してくれた。

いつもふざけてばかりのケヴィンが、復讐の計画を話したとき、真面目な顔で、頷いてくれたのだ。

レザックも、エリックを引き取ってくれた。

第一、レザックがいなかったら、アランともケヴィンとも離れ離れになり、復讐さえもできなかったかもしれない。

レザックはエリックとよく話した。

自分の時間を費やし、ずっとエリックに優しく接してくれた。

エリックとレザックは親子、というより、兄弟のようだった。

エリックがわかり、レザックがわからないこともあった。

血は繋がっていないが、エリックにとってレザックは、大事な兄弟のようだった。

その二人を、僕は今日、殺す。

僕からアノ二人を奪うことは、絶望に等しかった。

でも、迷いはできない。

エリックは碇の首飾りを握り締めた。

復讐の、強い意思を持って　。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6261a/>

A N C H O R

2010年10月10日13時40分発行